HIGH SCHOOL
COORDINATOR
START
GUIDE BOOK

学校と地域・社会をつなぐ

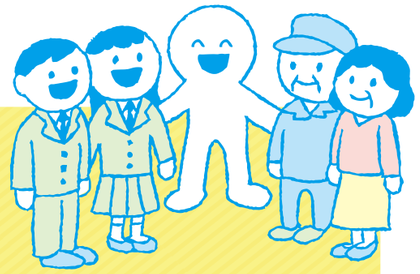
高校コーディネーター
スタートガイドブック

HIGH SCHOOL COORDINATOR
START GUIDE BOOK

学校と地域・社会を
つなぐ

高校コーディネーター
スタートガイドブック

文部科学省「高校コーディネーター全国プラットフォーム構築事業」



はじめに

平成29・30・31年改訂の学習指導要領では、よりよい学校教育を通じてよりよい社会をつくることを目標に、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指しています。高校コーディネーター（以下高校CN）は、これら目標を達成するために、学校と地域・社会をつなぎ、総合的な探究の時間をはじめとした探究的な学びを教職員とともに推進したり、コンソーシアム等の協働体制を構築し、持続可能で豊かな学びの場を創造する人材として、配置が進められてきました。

本ガイドは、高校CNになりたい人、また、着任予定、着任直後の方を対象に、高校CNとはどのような職務で、どのような力が必要とされているか、その力の身につけ方などを案内したものです。加えて、高校CNと働く高校教職員や管理職、採用・配置を行う教育委員会等の担当者が、高校CNを理解し、活躍してもらえる環境づくりに役立つ内容を収めました。いわば、高校CNが活躍する学校づくりのためのスタートガイドブックです。

高校CNに話を聞くと、高校CNに対して「総合的な探究の時間や学校設定教科・科目等における、外部資源との連携・協働」や「高校と外部団体・人材との協働体制構築」への期待が高いことが伺える反面、「期待される役割の曖昧さ、不明瞭さ」「教職員からの理解不足」「処遇の不安定さ」に悩む声も聞こえてきます。

このような背景には、高校CN本人はもとより、学校、教育委員会、地域など関わる人によって、イメージする高校CNの業務がさまざまであり、そのすり合わせが不十分であること、また、高校CNにどのような力や専門性が必要なのか明確でないことがあげられます。こうした状況から、採用・配置のミスマッチや処遇の不安定さが生まれているのではないかと考えられます。

そこで、本事業では、高校CNの職務を整理し、職務を遂行する上で必要な力を調査・分析・設定することで、標準的な高校CN像を見える化し、さらに、高校CNが学校で活動する準備ができている状態（＝高校CNのレディネス）を設定し、高校CN研修の実証を行いました。

これらの知見を生かし、本ガイドでは、高校CNとは何者なのか、どのように採用・配置、養成・育成をし、高校CNが活躍するための土壌を整えられるのかをまとめました。

「高校の特色化・魅力化」や「社会に開かれた教育課程」の実現はもとより、学校と地域・社会をつなぐ高校CNの存在が、未来の高校教育を明るくする起爆剤になることを祈っています。

もくじ

CONTENTS

はじめに 01

もくじ 02

この本の使い方 04

第1章｜高校コーディネーターの必要性

紙上パネルディスカッション

「高校コーディネーターって何者ですか？
どこから来て、どこへ行くのか？」 06

第2章｜高校コーディネーター人物図鑑

- 高校コーディネーター人物図鑑　#1〜15 14
- 高校コーディネーターのキャリアパス 22

【コラム】

「高校CNの素朴な疑問や俯瞰的な視点が、専門分化した教科教育からの脱却を促す」 24

「高校CNは“あなたの学校の地域”づくりを促進し、多様性を学校に運び込む存在」 25

- データでみる高校コーディネーター 26

第3章｜高校コーディネーターの職務と期待される力

- 高校コーディネーターの標準的職務 28
- 高校コーディネーターに期待される力 30

能力 32

知識 36

資質 38

【コラム】「先輩CNが伝える 高校CNが大切にしたい姿勢」 39

- 高校コーディネーター研修 40
- 高校コーディネーター研修の成果と課題 42

第4章｜高校コーディネーター活躍のための協働体制

- 高校コーディネーターが活かされる協働体制の構築 44

高校CN活用事例#01 46

高校CN活用事例#02 49

- Step1.学校経営の計画立案 52
- Step2.高校コーディネーターの人物像の確定 53
- Step3.高校コーディネーターの確保と財源 54
- Step4.高校コーディネーターの受け入れ 56

高校コーディネーターの活躍と校長、教育委員会の役割 58

- Step5.協働体制における位置づけ 60

【コラム】

VUCA社会における協働のしくみと学びのしくみとその運営 61

参考文献・注釈 62

おわりに 64

この本の使い方

この本の対象読者は、高校CNとして着任予定、着任直後、また高校CNを目指す方、高校CNと一緒に働く高校の管理職・教職員、高校CNを採用・配置したい教育委員会等の方々を想定しています。冒頭から読まれることを想定して作成していますが、下記のフローチャートを参考に、役職に合わせて必要なところから読みはじめることも可能です。

あなたの所属に従ってスタートしてください！

本ガイドのフローチャート

高校コーディネーター

- 高校CNがなぜ必要とされているか知っている → NO → 第1章 | P5-12
- ↓ YES
- 高校CNの仕事のイメージがついている → NO → 第2章 | P13-21
- ↓ YES
- 高校CNに必要な力を知っている → NO → 第3章 | P30-39
- ↓ YES
- 高校CNに必要な力を身につける方法を知っている → NO → 第3章 | P30-42
- ↓ YES
- 高校CNのキャリアパスについて考えている → YES → 第2章 | P22-23
- ↓ NO
- P64 おわりに

高校教諭／管理職

- 高校CNがなぜ必要とされているか知っている → NO → 第1章 | P5-12
- ↓ YES
- 高校CNの仕事のイメージがついている → NO → 第2章 | P13-21
- ↓ YES
- 高校CNに依頼する内容が決まっている → NO → 高校CNの職務を知っている → NO → 第3章 | P28-29
- ↓ YES
- 自校にあった高校CNの仕事内容がわからない → YES → 第4章 | P43-53
- ↓ YES
- 高校CNを受け入れる体制が整っている → NO → 第4章 | P56-59
- ↓ YES
- 地域・社会との協働体制が機能している → NO → 第4章 | P60-61
- ↓ YES
- P64 おわりに

教育委員会など学校設置者

- 高校CNがなぜ必要とされているか知っている → NO → 第1章 | P5-12
- ↓ YES
- 高校CNの採用方法はわかっている → NO → 高校CNの職務を知っている → NO → 第3章 | P28-29
- ↓ YES
- 自校にあった高校CNの仕事内容がわからない → YES → 第4章 | P43-53
- ↓ YES
- 高校CNの配置のための財源確保ができている → NO → 第4章 | P54-55
- ↓ YES
- 高校CNを受け入れる体制が整っている → NO → 第4章 | P56-59
- ↓ YES
- 地域・社会との協働体制が機能している → NO → 第4章 | P60-61
- ↓ YES
- P64 おわりに

CHAPTER 1

第1章

高校コーディネーターの必要性

総合的な探究の時間やキャリア教育など、今、学校に求められている教育は、地域や社会の方々の協力なくしては成り立ちません。「社会に開かれた教育課程」を実現することは、高校CN活用の第一の目標です。しかし、ただ忙しい先生方の代わりに、地域や社会と学校をつなげばよいのでしょうか？　そもそも、なぜ高校改革なのか？　なぜ社会に開かれた教育課程なのか？　なぜ、地域協働なのか？　高校CNが必要とされている背景を紐解き、文脈を理解することは、高校CNの足場を固めることに役立つはずです。

［紙上パネルディスカッション］

そもそものハナシ

高校コーディネーターって何者ですか？

どこから来て、どこへ行くのか？

なぜ、高校CNが必要なのか？　そもそも時代や社会は、なぜ高校CNを求めているのか？　高校CNの未来への可能性は？　高校CNが誕生した背景を振り返り、その存在理由から紐解いていきたいと思います。専門家の皆さんとの対話を通して考えてみましょう。

こーちゃん　こんにちは！　高校CNのこーちゃんです。毎日、高校CNとして働いているのですが、実は、自分が何者なのか、ちゃんと説明できないことが最近の悩みです。そこで今回は、4名のエキスパートにお越しいただき、僕の素朴な疑問「高校CNって何ですか？」を解き明かしていきたいと思います。まずは簡単に自己紹介をお願いします！

太田直樹さん（以下太田）　長く外資系コンサルタント会社で働き、縁あって総務大臣補佐官として地方創生に関わる仕事をしていました太田です。専門はIT活用支援です。

田村知子さん（以下田村）　大阪教育大学の田村です。専門はカリキュラムマネジメントです。実は高校教諭をやっていました。

中村怜詞さん（以下中村）　高校CNがいた高校で教員をしていました、島根大学大学教育センターの中村です。

藤枝秀樹さん（以下藤枝）　文部科学省（以下文科省）で視学官をしております藤枝です。実は私も香川県の高校で理科を教えておりました。

こーちゃん　現在高校CNは全国に230名以上いると言われています。そもそも高校CNは、どのように誕生したのですか？

そもそも高校CNって、いつ生まれたの？

中村　おそらく、初めて高校CNを受け入れた高校は島根県立隠岐島前高校だと思います。2000年代の初め頃、隠岐島前高校は統廃合の危機を迎えていました。子供たちは、廃校になると中学卒業したら島を離れなくてはいけない。しかし、高校生1人で住まわせるわけにはいかないから、いっそ一家で本土に移住しようとなる。そこに危機感を持った海士町役場は、町でCNを1名雇用して派遣するので、どうにか高校の魅力アップに努めてほしいと要望したわけです。

こーちゃん　なるほど。最初は統廃合問題や、人口流出を阻止したいという自治体の意向からだったんですね。

統廃合問題から、探究的な学びによる高校改革へ

中村　そうなんです。今でこそ島根県は多くの学校にコーディネーターがいるのが当たり前になっていますが、当初は必ずしも必要性が認識されておらず、学校内に入るまで2年以上かかりました。校内に入っても何をする人かわからないですから、最初は雑用的な仕事をして先生と信頼関係を構築することから始めたようです。そんな中、どうしたら魅力的な学校を作ることができるのかを試行錯誤する中で、取り組んだことの1つが、進学校の視察です。そこではいかに偏差値を上げるか、という詰め込み教育が行われていました。そこで考えたのが、この学校と真逆の学校、「一人ひとりの特性を大切にして多様な資質や人間力を伸ばす学校」というコンセプトです。

こーちゃん　文科省がいうところの「生きる力」に似ていますね。

中村　そうなんですけど、実際どうやって人間力を上げられるのか、教員の僕達にはわからなかった。僕に関しては、そもそも今までいかに偏差値を上げるかという教育をしてきたわけで、急に「課題発見・解決力と多文化協働力、キャリア形成意識の3つを育てます」と言われても……。

田村　課題解決力の重要性が強調されるようになったのは、平成10年（1998年）度改訂の学習指導要領[1]からで、総合的な学習の時間が導入されたのもこの時です。すべての学校で十分に実施されたかというと怪しいですね。

中村　そう、簡単に価値観は変えられないですから。そんな中、自主的な探究プロジェクトが「観光甲子園」で優勝したり、生徒が変わっていく姿を見ることで、高校は少しずつ変わっていきました。地域創造コースというコースができ、地域協働の授業が展開されていきました。元々は廃校阻止が目的だった高校CNの配置が、高校教育改革に風穴をあけた形になったわけです。

高校コーディネーター導入が国の政策になった？

こーちゃん　今では「我が校は〇〇力を身につけた人材育成を目指します」とか、地域協働というのをよく目にしますが、2010年代当初は、珍しかったんですね。では、どうして全国に高校CNが導入されていったのですか？

藤枝　それは文科省の政策が大きいと思います。高校CNを導入していった流れを紹介しますね。

まずは、平成30年3月に改訂された現行の高等学校学習指導要領です。この学習指導要領では、これからの社会を生きる子どもたち一人ひとりの生きる力を育成するために、各教科において「資質・能力の3つの柱」[2]を育成すること、と明記されました。その際の基盤とされたのが「社会に開かれた教育課程」の実現です。社会に開かれた教育には3つのポイントがありまして、1つは、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を、学校と社会が共有すること。2つ目は、子どもたちが必要な資質・能力が何なのかを明らかにして育成すること。3つ目は、地域と連携・協働して目指すべき学校教育で実現しましょうというものです。

これを受けて実施されたのが「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」（令和元年～令和4年）です。その中で実施された「高校と地域をつなぐ人材のあり方に関する研究会」において、社会に開かれた教育課程と地方創生を実現していくためには、高校と地域をつなぐ人材とコーディネート機能を充実させる必要があると議論されています。

こーちゃん　これが高校CN導入の先駆けだったんですね。その後は、どんな議論がされたのですか？

藤枝　そうですね。令和3年（2021年）に中央教育審議会（以下 中教審）[3]から出された「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」という答申の中で、すべての子どもたちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの実現のための改革の方針として、学校内外とで連携と分担による学校マネジメントの実現、外部人材専門スタッフと多様な人材が指導に携わることのできる学校の実現が謳われています。とりわけ、高等学校に関しては、高校生の学習意欲を喚起し、可能性及び能力を最大限伸長するための高校の特色化・魅力化の取組として、「スクール・ミッション[4]の再定義とスクール・ポリシー[5]の策定」をすべての高校においてやってくださいと言われたわけです。特に普通科高校においては、普通科改革の中で、各学年の特質に応じた国内外の関係機関との連携・協働体制の構築やCNの配置が求められるということが提言されました。かなり大事な答申だったと思います。

PANEL DISCUSSION

※注釈はp64参照

こーちゃん
高校CN歴3年。今回は、パネルディスカッションの司会者を務めます。

藤枝 秀樹さん
ふじえだ ひでき
文部科学省初等中等教育局視学官、国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官・学力調査官。筑波大学大学院理学修士。香川県立高等学校教諭を経て、文部科学省・国立教育政策研究所へ。中学・高校の学習指導要領の解説（理科、理数）の編纂に携わる。

田村 知子さん
たむら ともこ
大阪教育大学大学院連合教職実践研究科教授。九州大学大学院人間環境学府博士課程単位取得退学。博士（教育学）。中村学園大学准教授、岐阜大学教職大学院准教授等を経て2018年4月より現職。専門はカリキュラムマネジメント、教員研修、学校経営。

太田 直樹さん
おおた なおき
New Stories代表。東京大学文学部卒業。英ロンドン大学経営学修士（MBA）。モニターカンパニー、ボストンコンサルティングの経営メンバー、総務大臣補佐官を経て、現職。挑戦する地方都市を「生きたラボ」として、組織を越境し、未来をプロトタイピングすることを企画・運営。

中村 怜詞さん
なかむら さとし
島根大学大学教育センター准教授。島根県立高校教諭として、隠岐島前高校にて高校魅力化プロジェクトを推進。2018年から島根大学で教員養成プログラムや社会教育士育成プログラムを開発。専門は教育魅力化、総合的な探究の時間、社会科教育、学校組織マネジメント。

こーちゃん　僕もこの答申のおかげで、高校CNになれたわけですね。

藤枝　そうですね。そしてもう1つ「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ」というものが設置されて、令和5年(2023年)8月に中間まとめが出されました。その中でもCNについて書かれています。1つ目は小規模高校の教育条件の改善に向けて、働き方改革の推進とともに、CN等の配置支援をやりましょうということが提言されています。それから2つ目に探究・文理横断、実践的な学びの推進、高校の特色化・魅力化を進めるための学校外の関係機関との連携協力体制の整備、連携協力を支えるCNの配置が提言されています。

こーちゃん　探究的な学びを実践するためのつなぎ役としての期待はもちろん、小規模高校への支援や先生方の働き方改革のためにも、高校CNの配置が必要だとされたんですね。

学力とは何か？　学力の再定義はじまる

こーちゃん　「生きる力」の育成という国の教育の大きな目標があって、「社会に開かれた教育課程」を実現するために、高校CNの必要性が政策として提言されたことはわかったのですが、そもそもなんで、「生きる力」で「社会に開かれた教育課程」なんですか？

田村　高校CNがなぜ必要かを考える上で、「社会に開かれた教育課程」や「総合的な探究の時間」が生まれた教育の変遷や教育の目的を理解しておくことは大切なので、説明しますね。

こーちゃん　お願いします！

田村　教育の目的は、もちろん個人の幸せや発達のためという視点もありますが、もう1つの視点として、将来的に社会を作っていく担い手にしていくという、社会からの目線があります。これは、教育基本法の教育の目的[6]にも書かれています。

90年代、冷戦が終結し、日本ではバブルの崩壊、新自由主義[7]の影響などもあって、以前は真面目に勉強していれば、就職できて終身雇用で守られていたのが、そうはいかなくなりました。さらに、寿命が伸びてリタイアした後の人生が長くなり生涯学習社会という概念が登場しました。一人ひとりが社会を生き抜く力が必要だといわれ始めたわけです。そして平成元年(1989年)度改訂の学習指導要領でキーワードになったのが、自己教育力です。この改訂に向けて、学力とは何か、学力の再定義の議論がはじまりました。

今までの学校教育は、何を教えるかといったコンテンツ(内容)重視でしたが、それだけでいいのかという批判が出てきます。成果を上げる人に特徴的な資質・能力は何かという研究が主に企業の中で進み、コンピテンシー(意思決定や行動の特性)という考え方が登場します。2000年前後には、OECD[8]がキーコンピテンシー[9]という新しい能力概念を加盟国が参加して国際的合意を得て発表しました。このキーコンピテンシーの中の、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野を測るためのテストがPISA[10]です。

こーちゃん　産業界の影響はもちろん、国際社会からの影響も強いですね。工業社会から情報社会に移行し、社会が求める人物像も、その測り方も変わっていったということなんですね。

田村　そうですね。日本でも経済産業省では社会人基礎力、厚生労働省では就職基礎能力など、コンピテンシーベースの人材開発が重要視されていきます。こうした流れは、その後の学習指導要領に大きな影響を与え、冒頭に藤枝先生が説明してくれた現行の学習指導要領で明示された育成すべき「資質・能力の3本柱」につながっていきます。

総合的な学習の時間というパラダイムシフト？

田村　平成10年(1998年)度改訂の学習指導要領のテーマは「生きる力」で、ここから総合的な学習の時間が導入されます。この総合的な学習の時間のカリキュラムは、各学校で創意工夫して作るんですよ、となったわけですが、実際には、十分に実施されない学校も多かったんです。高校の多くの先生方は、地域や社会の力を借りて探究的な学習をやりたいと思っていても、ご自身が習ったわけではないですからやり方がわからない。一方で、いろんなことを抱え込んでいる学校は非常に忙しく、やりたいけどできない状況だったと思います。また、高校は小中学校と違って校区が広いから、いわゆる「地域」の範囲がどこで、どう結びついてよいかわかりにくいということもあったと思います。

高校生レベルの探究学習には高校CNが必要？

田村　それにただ、地域に出ればいいわけではないですよね。高校生にふさわしいレベルの学習が求められます。

中村　そうですね。地域課題に取り組む高校って多いじゃないですか。その中でも提案で終わってしまう高校と実践までやる学校がある。この差を分けているのは、地域との結びつきとか、関係性がどれだけ構築されているかによるんじゃないかと思うんです。例えば、「駅弁、空弁があるから港弁をつくりたい、観光客も喜ぶはず」と生徒が言う。でも地域のお弁当屋さんは、毎朝4時から仕込みをしていて、忙しくて高校生に付き合っていられない。高校生が提案したらすぐに実現できるわけじゃないんですよね。ここで2つ大事なことがあって、1つは、そもそも高校生の提案がちゃんと地域のニーズや、地域で本当に困っている人に寄り添っている提案になっているのか、もう1つが、地域側が高校の取り組みに対して理解を示していて、本当に一緒に生徒を育てようという意志を持てている状況まで、地域が耕されているか、ということだと思います。この2つが揃っていると実践まで行きつくのですが、学校の先生にとって、特に2つ目は結構難しい。

こーちゃん　高校生レベルのより深い学びのためには、単に地域の人を紹介するだけじゃなく、生徒はもちろん先生も地域のニーズや困り感をしっかり理解できるレベルまで関係性を構築することが必要なんですね。さらに、地域側の意識も重要で、教育を学校に任せきりにするのではなく、共に育てるんだという合意があるかないかも大切。つまり、学校と地域や社会とつなぐコーディネートと、地域や社会の人々をつないで教育に参画する協働体制づくりのためのコーディネートの2つが必要なんですね。

田村　地域側の学校教育へ参画の必要性は、まさにコミュニティ・スクール[11]で言わんとしていることですよね。学校のお手伝いではなく、共同経営者としての学校運営協議会です。こちらもしっかり地域の人同士の関係性を構築しなければ、単なるお飾り会議体になってしまいます。

学校と地域社会を持続的につなぐためには？

中村　公立高校には異動がつきものですから、たとえ関係性が築けてもその先生が異動したら、一緒に関係性も失われてしまいます。対して、教員の異動とは違う時間軸で動いている高校CNの存在は大きい。新しく来た先生も高校CNを通して地域とつながっていくことができるわけです。

さらに先生方はその地域の人じゃないから、誰に頼っていいかわからない。そこをサポートしてくれるのは、力強いと思います。

こーちゃん　高校CNの価値が少しずつ見えてきました！

太田　長く外資系企業に勤め、地方創生にも関わった自分からすると、「社会に開かれた教育課程」を文科省が打ち出してきた時は、すごく大胆だなと思ったと同時に、教育が変わる可

高校CNの職務の1つである協働・経営のコーディネートが面白いですね。マネジメントチームの一員として、地域や社会、学校同士もつなげる役割を担ってほしいです

TOMOKO TAMURA

高校CNは、教師のキャリア形成に新しいロールモデルを提示してくれます。僕の人生において、CNと一緒に働けたことは、大きなできごとでした

SATOSHI NAKAMURA

能性を感じました。

平成27年(2015年)から総務省の仕事で日本全国を回る中で、中村先生がいらっしゃった隠岐島前高校の生徒とも対話する機会がありました。その時、彼らから質問攻めにあったんですよ。30分の予定が1時間以上。本当に面白い質問をたくさんもらいました。地域でリアルな課題に向き合っている子どもたちの問いの力に、可能性を感じました。

あらゆる分野で必要とされているコーディネーターとは?

太田　CNって何かという話につながるんですけど、今って「正解」がわからない世の中だと思うんです。コロナパンデミックにしても、自分達が押し進めてきた近代化によって、自分達自身が問題の被害者でもあり加害者でもある状況を生み出しています。こうした状況に対して、2000年代後半からウィキッドプロブレム、日本語では「やっかいな問題」と訳されますが、この言葉がすごい勢いで使われるようになった。何が正解かもわからないし、正解かどうか判定することもできない。それでもこうした問題に対して、解決の糸口を見つけて進めている事例もあるわけです。それらを社会学的に分析すると、そこには「共創」が存在している。『やっかいな問題はみんなで解く』という本では、「さまざまな知識や意見、価値観を持った人がコミュニケーションをとり、相互に共感し、それぞれの意識と行動を変容させながら、課題解決の意味を共有し、心を一つにして解決の仕組みや方策を生み出していくことが重要である。『共創』とは、(中略)『共助』のもとで新しい価値を『みんな』で創出し、よりよい状態を実現することであるとともに、そのプロセスのなかで『みんな』自身が創り変えられていくことである」と説明しています。

さらに、どうも人と人とのネットワークが大事で、そのネットワークの結節点にいる人が情報を整理し、問題の論点を明確にして進めているようだとわかってきた。この結節点の人たちのことを日本では、「コーディネーター」と呼んでいることが多いんです。

このCNが何をやっているのかというと、違う価値観を持つ個人や組織が、同じ目的に向かって協働できるよう、ある種の翻訳をし、複雑な状況の中で認識を共有化できるように働きかけ、さらにいろんな人が組み合わさったときの意味を明確化しているのだと言います。今、学校が抱えている問題も「やっかいな問題」ですよね。学校だけでは解決できないからこそ、地域や社会を巻き込んで解決していきたいわけで、共創を生み出せるCNが必要なんです。

高校CNに必要な力って何?

こーちゃん　高校CNが必要とされていることがわかって、なんだか嬉しいです!　では、高校CNとして活躍するためには、どんな力が必要なんでしょうか?

中村　たくさんの高校CNにインタビューした経験から、CNには大きく3つのタイプがいると思っています。一番うまくいかない人たちは、「黒船型」って僕は名付けているのですが、「あなたたちのやってる教育は間違っているから教育を変えましょう」と学校教育を壊しに来られる人たちですね。大抵の人たちは、先生方と信頼関係を作れずにやめていきました。次に、いまいちうまくいかなかった人たちは「同化型」で、学校に染まり過ぎてしまう人。先生たちのためにと献身的に働いてくれるのですが、学校が変わることはなかった。僕が一番良かったなと思う人は「半順応型」、半分学校に身を預けてくれる人です。先生方をリスペクトしながらも、客観的に批判的に冷静に、問いを投げてくれる人です。例えば、中間テストって本当にやらなきゃいけないんですか?　とか。当たり前にやっていたけど、そもそも何のためにやっているだっけと、自分たちのやっている教育活動を検証することで、本当に大事なことは何かを合意していけるんです。

太田　今回、高校CNの専門性や求められる力が設定されたのはよかったなと思うと同時に、非常に汎用性が高い能力なんじゃないかなとも思いました。企業でも行政でも「越境人材」[12]が、必要だと言われているのですが、高校CNはこの越境人材に近い力を要していると思っています。普段やっている仕事とは違うけど、共通の課題意識だったり、共通の意味を明確化していったりして、新しい法令や政策を作っていく。先頭に立って動いてやる人です。伝統的な組織や労働市場では、高校CNの評価は定まっていないですが、高校CNの力っていうのは本当に大事なものが含まれているし、実際に私が出会ったCNたちは、企業に行ったらすごくいい仕事するじゃないかと思う人が多かったです。

田村　高校CNに求める力というと、専門性や、課題解決の引き出しがあることは強みですが、基本は、やっぱり子供たちの幸せを考えてポジティブに働いてくれることが大事ですよね。ご自身が抱え込み過ぎでも、先生たちに投げっぱなしでもなく、信頼を得ながら一緒に動ける人だと思います。

中村　高校CN自身が、そもそも自分が何者かわからないと思うぐらい新しい仕事だと思います。自分が何を求められているのかを考えて、力を磨いていく必要があるわけですから。そんな混沌の状況から、ここを目指していけばいいのね、という一定の心の安定剤として、この冊子を使えるといいんじゃないかと思います。

こーちゃん　学び続けるというのが大切ですね。頑張ります!

受け入れる側はどうすればいいの?

こーちゃん　一方で、高校CNへのアンケートで課題として挙げられているのが、期待される役割の不明確さや教職員の理解不足ということのようです。受け入れる高校や教育委員会などに求められていることはなんでしょうか?

藤枝　まずはCNって何をしてもらう人なのかという教職員の共通理解がしっかりできていることが重要です。現場はまだ十分に受け入れ態勢ができているとは言えないですが、協働できる信頼の土台づくりに注力することが必要だと思います。

中村　僕は、CN導入期は「CNのためのCN」が必要な時期があるんじゃないかなと思っています。あと、「先生とCNをつなぐ先生」ですね。CNの言語も理解し、学校の先生方の言語や考え方も理解しながら両者をつないでいく先生が、最初はいた方がスムーズに学校に順応できるかなと。学校の受け入れ態勢が不十分ゆえに、優秀なCNの方が学校に順応できなかったというケースもありましたから。

太田　人材育成の方法って、ここ数年で大きく変わっていますよね。1on1[13]という個人面談のようなものなど、個々の特性に合わせたものを取り入れている企業も増えています。単に高校CNに研修を提供するだけじゃなく、受け入れ側の管理職に対しても、教育委員会や文科省が、数年伴走するというのも1つの方法だと思います。あと、新しいことをやるわけですから、働き方改革はセットです。IT活用によって、業務削減するなどは必須です。

藤枝　個人的な意見ですが、やっぱり学校は変わっていかなきゃいけないと、多くの教職員は思っていると思うんです。しかし、じゃあどうやったらいいの?　というのがよくわかっていない。だからこそ、外部の方を学校に招いて学校を変えていくっていうような文化を、高校も醸成しなきゃいけないのかなと思います。

中村　教育観の変化ですよね。僕自身、人間力を育てますと言われた時に、すごく違和感みたいなものがあったんですよ。大事だとわかっているけど、生徒に点数を取らせる力を高めてきた自分からすると、今までの自分が否定された感じがして、前向きになれないという時期がありました。そんな僕が変わることができたのは、1つは徹底的にプログラムの順番や考え方、

高校CNに求められる力は、
企業や行政で注目されている
越境人材に近い。
キャリアパスとして魅力的です。
きっと海外でも活躍できますよ!

高校CNを通じて、高校の特色化・魅力化
につなげていってほしいですね。
何より、予測困難な時代にも
対応していける大人を
育成していきたいです!

その効果などを高校CNと対話することができたこと、もう1つはやっぱり生徒の変化なんです。今までの教育で、人間そのものが変わっていくような変化って見たことなかった。生徒の変わっていく姿が、僕を変えてくれたと思っています。順番として気をつけなくてはいけないのは、僕の価値観が変わったから、新しい教育活動ができたわけじゃなく、新しい教育活動をしてみたら生徒が変わって、自分も変われたという順番なんです。教師の信念研究の論文でも同じことが書かれています。違和感があるからやりませんと、僕がなっていたら、生徒の変化にたどり着けなかったと思います。すごくストレスのある状態でも取り組み続けることができたのは、目標とプログラムに確信を持っている人間がそこにいたからで、高校CNが学校にいる新しい価値なんじゃないかと思っています。もちろんプログラムの理念を理解し、説明できる存在は高校CNに限定する必要はありませんが、学校の先生は先ほども申し上げたように定期的に異動でいなくなってしまいます。優れたプログラムが開発されても、開発したメンバーが全員異動した後は抜け殻のようになってしまうのはよくあることなので、学校の先生の人事異動に左右されないカリキュラムのキーパーソンがいることは心強いです。

田村　本事業で取り組んでいる高校CN研修には、高校CNだけじゃなく、教職員も参加していると聞いています。高校CN向けの研修に先生方も参加する価値はあると思いますし、教職大学院などで高校CNも学べるようになると、お互いの理解につながりそうです。

高校CNの未来、可能性って何？

こーちゃん　まだまだはじまったばかりの高校CNの導入ですが、未来に向けた高校CNの可能性ってどんなものがありますか？

中村　1つは今の教育活動に疑問を投げかけてくれることで、前例踏襲を変えるきっかけを与えてくれる存在であること。もう1つは、教師のキャリア形成に新しいロールモデルを提示してくれることです。教師って単線型のキャリアの方が多くて、大学を出てからずっと学校現場の中で働いておられる方が大半です。そうすると、先輩教師との関りや研修などで授業やクラス経営、生徒指導などについては学ぶ機会も多くありますし、ロールモデルになる人との出会いもそれなりにあります。でも、高校CNと一緒に働くことで、プロジェクトマネジメントやマネタイズなど、今まで学ぼうと意識したこともないようなことも学ぼうという意欲につながったりしました。高校CNと一緒に働けたことで、教師以外のロールモデルになる人にたくさん出会えたことは、僕にとって大きかったです。

田村　高校CNの職務の1つである経営・協働に関するコーディネート、これが面白いと思っています。マネジメントチームの一員として、地域や社会との協働体制構築や教育委員会ともつながったり、各校の高校CNとつながっていくような仕組みがあるといいなと思いました。

太田　日本人って議論する時に、日本はダメだという論調になりがちですが、海外に行くと日本の初等中等教育ってすごく評価が高いんですよ。だから高校CNの仕事は、少なくともアジアで必要とされるはずだし、海外で活躍する人も出てくると思います。ちょっと広げ過ぎと言われそうですが、ちゃんとインパクトを出せると思いますので、非常に期待しています。

こーちゃん　実はもうすでにブータンにいるんですよ！（P23参照）

太田　そうですか、すごいな。あと、高校CNとしての力には汎用性がありますから、高校CN研修を企業の人に人材育成として受講してもらうのもいいと思います。企業の中にCNがいることで、より学校と社会がつながりやすくなると思います。

藤枝　スクール・ミッションに基づいて、スクール・ポリシーを立ち上げて、高校は学校教育活動を行っていますが、地域との連携が限定的になっており、「社会に開かれた」とは言い難い側面もあります。総合的な探究の時間の充実は、喫緊の課題であるのはもちろんのこと、地域・社会においても、一緒に生徒を育成してくれる社会人を育んでいかなくてはいけない。その意味においても高校CNは意義があると思います。この冊子ができたことで、高校の先生や地域・社会の皆様にも、高校CNについて理解を深めてもらえると思います。そして、高校CNを通じて、地域・社会と高校が協働し、その学校の特色化・魅力化につなげていってほしい。それが、ゆくゆくは、高校生の学びの質の向上につながっていくはずです。予測困難な時代にも対応していける、そういう大人を育成していきたいと思います。

こーちゃん　藤枝先生、太田さん、田村先生、中村先生ありがとうございました！　よし、これからも仲間と一緒に頑張るぞ！

CHAPTER 2

第2章

高校コーディネーター人物図鑑

全国に広がりつつある高校CN、しかしまだまだ新しい職業ゆえに、どのような経歴の人がどのように働いているのか知られていないのも事実です。そこで、本章では実際の高校CNへのインタビューを通して仕事の内容や働き方、なぜ高校CNというキャリアを選んだのか、そこで得られたスキルはどのようなものかを紹介していきます。知れば知るほど、高校CNは多様であり、その多様さが、高校に新たな風を吹き込んでいることもわかりました。

● 教育・探究CN ● 学際系 ● 常勤

真子 静佳さん

福岡県立八幡高等学校

SHIZUKA MAKO

「つなぐ」という仕事に、前職との親和性を感じ、コーディネーターに挑戦！学校・教員の方向性を丁寧に汲み取り、共に学校改革を推進するパートナー

出版社と書店を「つなぐ」前職との親和性

高校CNという仕事は、知人の紹介ではじめて知りました。高校に通っていた当時の自分のように、学校外のことを知らない子どもたちの手助けになれる仕事ではないかと感じたのと、出版社と書店をつなぐ前職の業務内容との親和性を感じたことが、やってみたいと思った理由でした。

外部連携と総合的な探究の時間の運営

新学科設立までは、研修部の中にある新学科推進課に所属し、新学科設立に向けた業務に取り組みながら、加えて総合的な探究の時間にも関わっていました。前者では、年に5回の運営指導委員会やコンソーシアム[14]等、校外の方も参加する会議の運営や資料作成を行っています。後者は主に2年生の授業を担当しており、指導案や実施要項を企画リーダーの先生と一緒に作成したり、生徒が取り組むワークシートを作成しています。資料配布準備等の事務作業や、授業自体の運営に入ることもあります。はじめは授業を見学しながら、指導案や実施要項の内容や必要性について教えてもらい、徐々に自分でも作るようになるなど、担うことのできる役割が増えてきました。

授業での学外との連携では、自分から外に出ていくことはそれほど多くないです。生徒が作るグループ2～3つにあたり教員1名が担当しているので、必要な場合のみサポートを行っています。また、生徒が関心を持った企業に連絡をとる際には、基本的には生徒の自主性を尊重して見守ったり、必要に応じてアドバイスしたりするようにしています。新学科での教育がスタートした令和6年(2024年)度からは、1年生の総合的な探究の時間にも、外部の方との折衝・調整という点でサポートを行っています。新学科では探究のサイクルを1年生時点から回していこうということで、学年の探究リーダーの先生と検討を重ねました。結果として、1年生は、2年生から始まる課題研究の練習として、地域の企業や大学、研究団体等の方から提供された「自社課題」をもとに、関心のあるテーマを探究する形としました。高校CNとして、コンソーシアムの方を中心に、学外の方への協力依頼、発表会への参加依頼、生徒への指導依頼等の折衝・調整を行っています。

コンソーシアムの方々との協働も数年経過し、学校の雰囲気や課題感も共有できてきました。そのため、学外の方が生徒に指導する際も特に制限は設けず、率直に思ったことを伝えてもらっています。また、生徒たちにも、大人の意見を「正解」として丸呑みしないようにと、両者のコミュニケーションを仲立ちしています。

定例会議と気軽なコミュニケーションがコツ

毎週火曜日の授業の空き時間に校務分掌の定例会議を行っています。先生方とはお互いに時間が空いたタイミングを見計らって声を掛け合います。短時間でお話しできる場を週に何度か設けて、進捗共有や役割分担を確認し合いながら進めるよう心がけています。

総合的な探究の時間で関わっている2年生の先生方を通して、各分掌や学校の組織体制をよく把握することができました。元々、先生方が気軽に話しかけてくださる雰囲気がある学校でしたが、研修部長である廣濱先生が高校CNの役割や成果について他の先生に伝えてくれたことで、よりコミュニケーションが取りやすくなったと感じています。

高校CNは学校改革の方向性を汲み取り、実現する「サポート役」

高校CNの役割やスタンスとして、学校改革に取組む一人のメンバーではありますが、学校の方向性を汲み取り、実現するサポート役という立場を意識しています。例えば、総合的な探究の時間の計画は、例年の流れを把握している私から大枠を提示し、改善案や新たに取り組みたい活動内容について先生と話すような役割分担をとっています。

関係性あってこその協働だと思っています。もともと根付いていた高校と外部の関係性を大事にしながら、八幡地区でのネットワークを維持・拡大していきたいと考えています。そのため自身のスタンスとしても、普段から気軽にコミュニケーションを図れる関係づくりを心がけ、八幡高校がどうしていきたいか、生徒がどうしたいかなどを大切に、引き出していきたいと思っています。また、自分がいることで先生方の負担が減ると良いと考えています。

DATA

まこ しずか

大学卒業後、出版取次会社に勤務。福岡県内の書店への提案や店頭改善等の営業に従事。大学では教育を専攻し初等教育の第一種免許を取得。家族も教員をしていたため、教育には高い関心を持っていた。令和4年(2022年)8月より同校の普通科改革支援コーディネーター。

勤務形態 週5日の常勤勤務

主な業務 総合的な探究の時間や公開授業の企画・運営支援
連携機関との連絡調整
新学科情報の発信や情報収集　等

▶ 1日のスケジュール

09:15	出勤 メールやスケジュールのチェック
09:30	生徒の探究活動のチェック
09:30	総探リーダー教員との打ち合わせ
11:30	休憩
12:45	生徒との面談、活動に対する助言等
13:30	関係機関担当者との打ち合わせ
14:30	総合的な探究の時間の準備
15:30	総合的な探究の時間参加
17:45	退勤

福岡県立 八幡高等学校

- 全日制／文理共創科(令和6年度～)5クラス、理数科2クラス
- 学校設定科目「知の追究」で実施する教科等横断型授業と、総合的な探究の時間「夢現プロジェクト」の両輪で、横断的視座と課題解決力を持った人材を育成
- かつて官営八幡製鐵所があった地域であり、現在はSDGs推進に先進的に取り組んでいる

SHIZUKA MAKO

● 協働・経営CN ● 地域系 ● 非常勤

神宮司 亜沙美さん

北海道大樹高等学校

ASAMI JINGUJI

総合的な探究の時間のカリキュラム作りをきっかけに高校CNに就任

大樹町は小学校・中学校・高校が1校ずつある町で、1つの学校運営協議会が設置されています。小中高で一貫した教育が意識されているなど、日頃から学校種間での連携が進んでいます。私は平成27年(2015年)に大樹町にUターンした後、はじめは小中学校で教育CNとして活動をしていたのですが、大樹高校でも総合的な探究の時間を充実させようという動きがあり、令和2年(2020年)頃、カリキュラム作りからお手伝いを始めました。教育現場は入りにくいイメージを持っていましたが、教員でなくとも教育に関わることができる貴重なチャンスだと思いチャレンジし、今は非常にやりがいを感じながら日々過ごしています。なお、令和5年(2023年)からは高校専任のCNとなっています。

高校改革の草創期から、学校と共に高校CNの役割を開拓

主な業務は総合的な探究の時間の企画とコーディネート、生徒への伴走ですが、状況に応じてかなり幅広い業務に携わっています。例えば、令和6年(2024年)度の新学科設立に向けたカリキュラム作り、小中高で一体的に設置されている学校運営協議会の部会運営、学校パンフレット作成等の広報活動などです。そのほか、大樹町の「大樹高校活性化推進協議会」のワーキンググループにも参加しており、町全体の戦略立案にも関わっています。

高校改革の草創期から関わっていることもあり、高校CNの役割が何なのか誰もわからないまま、先生方や地域と共に試行錯誤し続けてきたという感覚があります。数年経った今も、やはり「ここからここまでがCNの役割」という線引きは難しいのではないかと感じます。自身としては高校CNの役割を開拓することにも面白さを感じますね。

アイデア段階から教員と一緒に話し合いながら協働

ちょっとした相談は高校CNとの協働を担ってくれる教員の方に声をかけています。そのうえで、じっくり議論が必要な場合は他の教員も巻き込み、ミーティングをセットすることもあります。毎日学校にいるわけではありませんが、職員室の中に自席があるため、先生方とも気軽に相談できる環境になっています。業務の相談ばかりではなく、「今地域ではこんなことが起こっているよ」「こんなことに困っているよ」といった雑談もしますよ。そういった日常の気軽なコミュニケーションも、良い関係性を築くうえで必要だなと感じます。

前述の通り、先生方とは同志のような関係性で、依頼を受けて対応するというより、アイデア段階から一緒に話し合う形が多いです。ただし、授業の評価は教員主体で自分はアドバイザーに回っているほか、普段の生徒の様子(日々の生活の様子や得手不得手といった情報)は先生の方から情報提供をしてもらっています。

DATA

じんぐうじ あさみ

システムエンジニアを経て、地域おこし協力隊として 平成27年(2015年)に大樹町にUターン。小中学校の教育CN(地域学校協働活動推進員)として活動後、現職。自身で起業もしており、地域の事業者のＰＲを事業として行っている他、過去には町からの委託でふるさと納税の推進業務等も受託していた

勤務形態 決まった曜日や時間はなく、週２～３回、授業のあるタイミング等必要に応じて来校

主な業務 総合的な探究の時間や学校設定科目について、教員と協働で企画づくりや地域や連携機関との連絡調整、授業における生徒への伴走など

1日のスケジュール

09:00	出勤
09:30	町教育委員会、町企画課と高校魅力化に関する打ち合わせ
11:00	地域の人にメールや電話で協力依頼
13:00	依頼文書をもって、地域の協力者にあいさつまわり
15:30	地域デザイン等、授業の打ち合わせ
16:45	業務終了

ASAMI JINGUJI

地域で構築してきたネットワークを学校現場にも還元。自身の企業経営や地域での活動など、兼業である強みを生かし、学校とともに地域づくりにも携わる

兼業であることや、地域に足場を持つことの強みを活かす

自分は兼業高校CNですが、兼業であるからこその利点もあると感じています。大樹高校は小規模校ということもあり、学内にいるだけでは週5日もスケジュールが埋まりません。別の仕事をしたり、地域の中で活動したりすることが、情報収集や人脈を広げることにつながっています。地域とのネットワークは芋づる式に広がっていくもので、その時自分では接点を持っていなくとも、すでにあるつながりを通じて、思わぬ出会いに恵まれることもあります。

また、システムエンジニアの時にお客様や関係部署との交渉を担った経験や、チームマネジメント、チームビルディングを学んだ経験も、高校CN業務につながっていると思う瞬間もあります。高校CNとは、さまざまな職業経験を生かせるお仕事かもしれませんね。

北海道 大樹高等学校

- 全日制／地域探究科(令和６年度～)1クラス
- 個別最適かつ協働的な学びを実施する「大樹スタンダード」による授業づくりを実践。また、職業理解や多世代交流、国際交流による多様性・共生社会を通して自身のキャリア観を育成する「キャリアデザイン」(総合的な探究の時間)、宇宙産業や第一次産業が盛んな大樹町と連携した「地域デザイン」(学校設定科目)を実施
- 大樹町唯一の高校であり、地域ぐるみで学校の魅力化に取り組み、地域を支える人材育成を行っている

● 教育・探究CN ● 学際系 ● 非常勤

竹中 敏浩さん | 東 善仁さん | 林 留里さん

TOSHIHIRO TAKENAKA | YOSHIHITO HIGASHI | RURI HAYASHI

兵庫県立御影高等学校

特長の異なる3名のコーディネーターが教員とチームを組むことで、新たな学際領域学科のカリキュラム構築・運営を多面的にサポート

3名のコーディネーターの強みを踏まえた役割の明確化

私たちは、文理探究科という新学科のカリキュラム構築・運営にあたり、プロジェクトリーダーの橋本先生の下、3名で役割分担しながら協働しています。竹中さんは、県立高校学校長を歴任し、県内大学や博物館などとのネットワークが強いことを活かし、コンソーシアム等の会議ファシリテートのほか一部授業の企画・運営を担当しています。また、東さんは、民間企業の代表を務め、地域プロジェクトの企画運営・コーディネーションを生業としている強みを活かし、地域・民間企業と協働する講座の連携・企画・運営を担当しています。さらに林さんは、大学院在学中の学生ですが、公立高校の探究活動に参加した経験を活かし、生徒に近い存在として探究活動の相談相手(伴走)などサポーター的役割を担っています。

お互いに顔をあわせる機会が少なくても情報連携できる工夫を

プロジェクトリーダーの橋本先生と個別に打ち合わせを行い、週ごとに勤務予定を確定させています。3名とも非常勤職員であり、役割分担も異なることから全員で顔を合わせる機会はほとんどありません。しかし、お互いの業務進捗などを共有しておくことは不可欠ですので、情報共有基盤としてSlackを用い、同時に出勤していなくても情報連携や、ファイルのやり取りがスムーズにできるよう工夫しています。

DATA

たけなか としひろ

兵庫県立三木東高校・北摂三田高校長を歴任し、定年退職後、兵庫県立人と自然の博物館専門員を経て特任研究員。関西学院大学・武庫川女子大学の非常勤講師を兼任

勤務形態 年間322時間(月平均約27時間)の非常勤勤務。役割に応じて不定期に勤務

主な業務 大学・研究機関等との連携依頼・連絡調整、校内の組織体制整備支援

ひがし よしひと

合同会社ユブネ共同代表。神戸・奈良・島根を拠点に地域プロジェクトの企画運営に従事。最近の実績としては「神戸市地域協働局ワークショップ」実施など

勤務形態 年間322時間(月平均約27時間)の非常勤勤務。役割に応じて不定期に勤務

主な業務 Creation I (STEAM講座)のコーディネート、情報連携基盤の整備・運用

はやし るり

立命館大学経営学研究科博士課程後期課程在学。大学院での研究活動、NPO法人Colorbathでの社会貢献活動の傍ら、CN業務に従事

勤務形態 年間322時間(月平均約27時間)の非常勤勤務。役割に応じて不定期に勤務

主な業務 生徒探究活動の伴走および記録作成、高大連携授業の調整、中学校への広報等

兵庫県立御影高等学校

◉ 全日制／普通科7クラス、文理探究科1クラス(令和6年度～)
◉ 文理探究科は、文理融合の学びを展開する県内初の普通科・学際領域学科であり、従来の総合人文コースの学びに自然科学の要素を加えた文理融合型の学科。「地域の課題を考えることが、地球規模の課題を考えることにつながっている」という実感を得られる学びを実践

● 協働・経営CN ● 地域系 ● 非常勤

二宮 真弓さん

高知県立清水高等学校

MAYUMI NINOMIYA

高知県立清水高等学校

◉ 全日制／普通科1クラス(令和7年度～未来共創科)
◉ 令和7年度に普通科を「未来共創科」へ改編し、「21世紀のジョン万次郎」を掲げ、国際的・地域連携を重視したカリキュラムを実施予定
◉ 高校が所在する土佐清水市はジョン万次郎の育ちの地域であり、米国フェアヘイブン市や台湾との国際交流を行っている

元観光商工課長としての地域とのつながりを活かし、21世紀のジョン万次郎を育成。教員とともに生徒の探究を促進するサポーター

自治体職員としての経験を買われコーディネーターに

土佐清水市役所職員、特に観光商工課長としての勤務経験から地域とのつながりを持っており、その点を期待され令和5年(2023年)より高校コーディネーターとして勤務しています。総合的な探究の時間のサポートおよび地域人材と学校をつなぐことをメインの業務とし、新学科設立に向け、総合企画部とともに業務に取組んでいます。授業は主に1、2年生に関わり、生徒が探究テーマを決める中で必要な地域人材の紹介を行っています。また月に1回程度実施されるワーキンググループに参加し、地域人材との連携の観点から議論をサポートしています。

教員や生徒への負担を意識しながら協働

学校での勤務経験がなかったため、はじめのうちはどこまで業務を行っていいのか悩む場面もありましたが、先生とのコミュニケーションを通じて徐々に業務を確立してきました。私だからこそできる地域とのつながりを活かし、生徒に魅力ある土佐清水のことを知ってもらいながら、探究活動を豊かにするサポートをすることはもちろん、同時に先生方の調整負担を少なくすることや、生徒の授業内での負担が大きくなりすぎないようにすることも意識しています。

DATA

にのみや まゆみ

42年間の土佐清水市役所への勤務経験を有し、観光商工課長であったため広く市内の産業や人材について熟知。令和4年(2022年)度より清水高校の学校運営協議会、コンソーシアムに参加。令和5年(2023年)度より地域連携コーディネーターとして同校に着任

勤務形態 週2日の非常勤勤務(月曜:探究授業のサポート、金曜:教員との会議)、教員の打ち合せや、生徒と地域人材とのマッチングなど、それぞれの都合に応じて曜日にこだわらず活動

主な業務 総合的な探究の時間の運営支援、地域の関係者と生徒の接続、新学科のカリキュラム制定に向けた議論等に従事

▶1日のスケジュール

14:30	出勤 教員との総合的な探究の時間の打ち合わせと資料の準備や確認
15:30	授業に参加
16:30	授業の振り返り 次回授業の内容や準備作業の確認等 (校外講師との打ち合わせ他)
17:30	業務終了

南 友博先生

二宮さんと二人三脚でコーディネート機能を担う南先生。高校CNが力を発揮するためには、チームで動くことが重要

多様な高校コーディネーター

年齢も前職も働き方も多様でバラエティ豊かな高校CN。
この多様さが高校に新たな視点をもたらしています

教員と高校CNの兼業だからこそ、カリキュラム開発とコーディネートを一体的に推進できる

大木島 詳弘さん

●教育・探究CN ●地域系 ●常勤

浜松学芸高等学校

東京の出版社を経て、縁あってこの学校の教員になりました。現在は地歴や探究創造の授業を担う教員でありながら、地域協働のための学内CNも兼務しています。きっかけは、教員派遣でアメリカのSTEAM教育[15]に触れたことです。地域が学びの場になり、様々な地域リソースを学校に還元できたら面白いだろうなと思いはじめました。課題や問題も大切ですが、地域の魅力あるリソースを発見する肯定的に物事を捉える視点が、高校CNにとって重要な力だと思います。

おおきしま あきひろ
大学院卒業後、教科書の出版社に勤務。日本や世界を取材で回る。教員、コーディネーターに加え、社会科学部地調査班という部活動顧問も担当

勤務形態 週5日の常勤
主な業務 高校教諭、探究創造科1年担任、地歴科担当で地理の授業と探究創造の授業、社会科学部地調査班顧問、地域協働CNを担当

校長経験者として、新学科の探究授業を開発・試行今までの授業では見られなかった生徒の力を実感

中山 隆之さん

●教育・探究CN ●学際系 ●常勤

三重県立上野高等学校

三重県教育委員会や現職校長からの依頼で、高校CNに着任しました。普通科新学科を立ち上げるにあたって必要な、カリキュラムや授業づくり、試行から、大学・行政・企業等との連携調整、新学科のPRツールの作成までやっています。今までの授業では見られなかった生徒の力や未来に向けての可能性を感じています。授業に関わる高校CNに必要な力は、生徒の成長を感じ取れる感性だと思います。新しいことをしたい人、明るく、人懐っこい人に向いている仕事ですね。

なかやま たかゆき
大学卒業後、三重県の国語科の教員として採用され令和3年定年退職。平成10年から2年間、中国の大学に派遣され日本文化などを教える

勤務形態 週4日の常勤(所属は県教育委員会高校教育課)
主な業務 新学科設立に向けた、探究授業の開発とPRツールの作成。大学・行政・企業とのネットワーク構築等

公立高校CNから私立高校CNへ探究学習のプロCNとして、日々奮闘中です！

長谷川 夕起さん

●教育・探究CN ●学際系 ●常勤

京都橘中学校・高等学校

前職は、地域おこし協力隊として京都府立高校の高校魅力化CNをしていました。その時に出会ったのが、京都橘高校のK先生。探究学習の専門家を探していたK先生から、任期終了間近にスカウトされ現職に。大学院では物質系工学を学び、試験業務受託企業に入社。退職後に個人事業主として、ボードゲームを使った学びの場づくりやコーチングに従事。教育業界以外の経験と公立高校での経験が大いに役に立っています。「百聞は一見にしかず、経験に勝るものなし」をモットーに日々奮闘中です！

はせがわ ゆうき
大学院卒業後コベルコ科研入社。退職後、個人事業主として学びの場づくりやイベント主宰、コーチング業を始める。与謝野町高校魅力化CNに従事後、現職

勤務形態 週5日の常勤
主な業務 総合的な探究/学習の時間のカリキュラム開発。それに伴う教材づくりや外部との連携、学びの場の段取り

石本 冴さん

●協働・経営、教育・探究CN ●地域系 ●常勤

愛媛県立三崎高等学校

キャリアのスタートは、高知県での音楽の講師でした。その後、室戸市観光協会を経て、青年海外協力隊でモンゴルに行ったり、ミャンマーの日系企業で働いたり、多様なキャリアを積んできました。そんな中、夫の転勤で伊方町へ移住。そこで高校CNという仕事に出会いました。あらゆる場面でコーディネートするのが好きです。フットワークが軽く、好奇心と学ぶ意欲、そして、多様な生活経験があることが、高校CNとして、学校に入っていく価値になると思います。

いしもと さえ
中高の音楽講師、室戸市観光協会、JICA青年海外協力隊、ミャンマーの日系企業で営業事務や総務(サポート業務全般)を経験し、現職

勤務形態 週5日の常勤
主な業務 生徒募集、外部講師招聘、探究等の授業サポート、地域との連携協働、資金調達等

JICA青年海外協力隊やミャンマーでの勤務経験が、教員とは異なる視点を持てる、私の強み

楠香谷 隆規さん

●教育・探究CN ●地域系 ●常勤

広島市立美鈴が丘高等学校

約34年間、食品会社(製パン、豆腐等)で、製造から資材調達、製造オペレーション、商品開発、流通・販売まで、多くの業務に従事してきました。前職は、特別支援学校で農業や食品加工に関する実習教員として5年半ほど勤務。その間AIについても資格を取得しました。そんな折に高校CNの募集が目に入り応募。まだ従事して1年ですが、高校CNの仕事は、臨機応変にバランスをとりながら、仕掛けて行くサーファーのよう。AIにはできない仕事として捉えて、実施していきたいです。

なかや たかのり
食品会社を経て、広島県立三原特別支援学校高等部で、農業、食品加工等の作業学習の実習教員として勤務。教員枠で採用され、高校CNとして探究学習支援に従事

勤務形態 週5日の常勤
主な業務 探究学習支援

食品会社の経験から実習助手へさらにAIの知識を身につけ高校CNに転身しました

宮野 準也さん

●協働・経営CN ●地域系 ●常勤

島根県立隠岐島前高等学校

公営塾スタッフ、小中学校魅力化CNを経て、4年前に教育魅力化プロジェクトリーダー兼高校CNに就任しました。大学で教員免許は取得したのですが、先生になった時に一般企業の経験が役に立つはずだと思い就職。4年後「教育で島を盛り上げよう」としている町があると知り、ロマンとエモさを感じ移住しました。高校CNは、学校と地域の新しい物語をつくる仕事だと思っています。生徒、先生、地域の方々の想いや変化、成長に、心震える毎日です。

みやの じゅんや
大学卒業後、ニトリホールディングスに勤務。隠岐國学習センター(公営塾)スタッフとして海士町に移住してから11年間、小中高の魅力化に携わるベテラン

勤務形態 週5日の常勤
主な業務 プロジェクトリーダー、学校経営チーム、コンソーシアムマネージャー

小中学校魅力化CNからスタートし、今では、小中高すべての教育魅力化プロジェクトリーダーに！

中学教員としての違和感から、一旦立ち止まって、教育とは何かを考えてみたかった

星野 眞理さん

●教育・探究CN ●地域系 ●常勤

岩手県立大槌高等学校

中学校教員をしていた時、生徒たちが「高校で何をしたいのか」「何を学びたいのか」を考えず、ただ合格できる高校を探していく過程に違和感をずっと持っていました。画一的な授業や生徒指導に対しても「本当にこの教育でよいのだろうか」と、いったん立ち止まってみたくなったのが、転職のきっかけです。「もっとよくなるんじゃないか」と前向きに、探究心と向上心を強くもっている方には、とても刺激的で楽しい仕事だと思います。たくさんの仲間とチームで働けることに醍醐味を感じています。

ほしの まり
大学卒業後、公立中学校教員として勤務。キャリア教育、探究学習、不登校、校則検討等様々なことに関心をもち始め学校の外に出ることを決意。NPO法人カタリバに転職

勤務形態 常勤(大槌町から認定NPO法人カタリバへの業務委託)
主な業務 総合的な探究の時間の授業設計、カリキュラム設計、進路指導、教員研修等

卒業生で、探究学習経験者だからこそ、あのとき欲しかった支援を高校生に届けたい

竹本 佳代さん

●教育・探究CN ●地域系 ●非常勤

宮崎県立飯野高等学校

飯野高校探究コースの2期生です。「CNとして働いてみないか」と恩師に声をかけられたことがきっかけで高校CNになりました。私が在学していた時は、高校CNはいなかったので、CNという職業が何なのかわからず正直迷いました。高校生の時に探究活動がうまくいかず、「教員でもなく生徒でもない、探究の相談やサポートをしてくれる人はいないのかな」と思っていたこともあり、「私がその人になろう」と決意しました。卒業生で探究活動経験者だからこそできる伴走を心がけています。

たけもと かよ
飯野高校普通科探究コース卒業。大学卒業後、一般企業勤務、カフェ勤務を経て、母校である飯野高校の高校CNに従事

勤務形態 非常勤(20日/月)
主な業務 毎週水曜日の探究の時間のサポート、生徒が行う探究活動の伴走、探究でお世話になる地域の方との連絡・伴走サポート

現役大学教員としてカリキュラムCNに従事。先生とともに高校のあるべき姿に向けて改革中！

廣川 祐司さん

●教育・探究CN ●地域系 ●非常勤

北九州市立高等学校

北九州市教育委員会からお声がけいただき、北九州市立大学で大学教員をしながら、カリキュラムCNとして授業づくりをしています。高大連携事業や高大接続の必要性が高まっている中、大学人として「高校生と大学生」「高校生と社会人」とで、一緒に地域で学ぶ場を高校の先生たちと作っていきたいと思い活動しています。高校CNの仕事は、他者とともに、新たな挑戦を一緒に楽しめる気質を持った人が向いています。高校の在るべき姿に変えるお手伝いができていることにワクワクしています。

ひろかわ ゆうじ
北九州市立大学地域創生学群地域マネジメントコース准教授。ゼミ活動として高大連携事業を行い地域課題解決型学習の実践を行っている

勤務形態 非常勤(3日程度/月)
主な業務 カリキュラムCNとして、高校教員と一緒に授業を作ったり、外部者(企業・大学)と授業を共同実施する企画を作成

高校コーディネーターのキャリアパス[16]

共創的課題解決が求められる今、越境的協働を促すCNの経験は、
さまざまな教育現場で活かされています。
高校CNから大きく羽ばたいた4人の高校CN経験者を紹介します。

森下 真穂さん

MAHO MORISHITA

高校CN ▶ 中学校教諭

まさかの教職採用試験に不合格
高校CNとして学んだことは、
自分自身に向き合う方法

中学時代の恩師に憧れ、中学校教師を目指していました。しかし、教職採用試験にまさかの不合格。途方にくれていた時に出会ったのが、高校CNという仕事でした。教育に関わる方法は教師しかないと思っていた私の常識が覆された瞬間でした。

島根県立大田高校初のCNとして、情報発信、総合的な学習の時間の企画・運営、地域連携、放課後の学びの場づくり、居場所づくり、生徒のプロジェクト活動の伴走、コンソーシアム設立準備など、4年半で多くの経験をさせてもらいました。その中で身につけたものは、スキル以上に「自分の在り方」だったように思います。

新卒で高校CNになったこともあり、学校、地域、行政と様々な機関の方から学ぶ姿勢を大切にしていました。それは、他者を尊重することにもつながり、その意識がベースにあることで、他者との協働性や対話力は向上し、よい関係性を築くことができていたように感じます。現在は故郷浜松で、中学校教師として働いています。立場が違えば見える世界も違うということ、視野を広く持つことを高校CNの仕事を通して学んだからこそ、今に活かせていると感じています。

高校CNは、まずはやってみる！　という行動力が大切だと思っています。行動すれば何かが変わる、人との出会いがチャンスを導いてくれる。何か問題が起きたら、自分自身を見つめ直してみる。相手を変えるのではなく「自分自身をほぐすこと」。やってみてください。

もりした　まほ
専修大学人文ジャーナリズム学科卒。大学で生涯学習や社会教育について学ぶ。教員採用試験に不合格になったことをきっかけに、島根県大田市に移住。島根県立大田高校の高校魅力化コーディネーターに就任。令和3年度より地元浜松市で中学校教員として勤務

豊田 庄吾さん

SHOGO TOYODA

公設塾長、高校CN ▶ 行政職員
▶ 教育委員会教育次長

組織を超えて人を動かす
越境的リーダーシップは、
教育行政のリーダーに必須の力

広島県三次市教育委員会で教育次長をしています。教育長の右腕として、市が実行したい教育政策を校長先生や教員の皆さんに、研修を通して浸透させていくことや、小学校1年生から中学3年生までが取り組む市内共通の教育課程の見直しなどを行っています。

人材開発や組織開発を行う民間企業から、学習センター長や高校CN、行政職員を経て、今は、教育行政のトップリーダーを目指しています。その理由は、30代に掲げた地域×教育をテーマに人口減少地域に光を当てるという志の実現と、高校CNというポジションは後輩たちに譲り、自分は高校CNのキャリアパスとしての教育長という選択肢を示すことが使命なのではないかと思ったからです。

教育行政は、政策を通じてよりよい教育を実現するのが仕事。現場で子どもたちに直接教えるわけではありません。先生方がやる気になって動いてもらって初めて政策が活きるのです。これを組織を超えた働きかけ=越境的リーダーシップと呼んでいるのですが、立場は違えど高校CNの仕事も同じ。教育を変えていくためには、学校も先生も、地域の人も変わる必要があります。しかし、直接的に変えようとすると変えられないという逆説があります。まずは相手をリスペクトし、相手の言葉がどのような意識や考えから発せられているのかを理解し、環境を変えていく。そして全力で応援し伴走していく。相手が動いてくれるための、関わり方やあり方を常に自分に問うことを高校CNの経験で身につけられたと思います。

コレクティブインパクト[17]が必要とされる時代です。行政でも企業でもリーダーになっていく人は、高校CNの経験は効果的だと思います。人を動かす力は越境や逆境体験によって身につくものですから。

とよだ しょうご
広島大学卒業後、リクルートにて人事、人材育成会社ウィル・シードにて企業研修講師を務める。平成21年より島根県海士町に移住し、隠岐國学習センターを立ち上げ、初代センター長に就任。島前高校CNを兼務。令和3年海士町役場入庁。学びづくり特命官として大人の島留学事業に従事する。令和6年広島県三次市教育次長に就任。現在、日本で唯一の教育長育成コースである兵庫教育大学大学院教育政策リーダーコースに在籍中

オオツジユウスケさん

OOTSUJI YUSUKE

公設塾マネジャー、コンソーシアムマネジャー
▶ 高校校長

学校・地域、双方の言語を理解し、
全方位型で調整できる力が、
新しい学校づくりの要

道立と町立高校が合併してできた町立高校の校長をしています。東京の教育関連会社に勤めた後、島根県海士町で公立塾のマネジメント、高知県嶺北高校でコンソーシアムマネジャーを務めました。北海道大空高校には、地域情報化アドバイザーとして設立ワークショップに関わったことがきっかけで校長になりました。

高校CNを経験して身についたスキルは、言語や文化が違う田舎や学校という組織の中で、どことも喧嘩しないで、全方位的に調整を重ね、物事を進めていく力です。大空町が私を校長に選んだ理由も「学校とうまくやれそうな気がする」からだったそうです。重要なのは、ただ言われたことをするのではなく、頼まれたことを120%で返すこと。自分の得意分野で成果を出せば、次の企画を任せてもらえますし、次のキャリアが広がります。

過疎地での高校CNの仕事は、高校魅力化が地域の人口動態に直接つながる、まさに地域課題解決プロジェクトです。主体性・社会性・協働性・探究性という高校生に求めている力は、高校CNに求められている力そのもの。だからこそ、高校CNが背中で高校生に伝えられることがあると思います。

地域探究や越境学習ができる高校を実現させることは、子どもたちに、もう一つの人生の選択肢を提供することだと、私は思っています。教育で世の中に一石を投じたい人にとって、高校CNは価値ある経験になると思います。

おおつじ ゆうすけ
慶応大学卒業後、塾・予備校等で算数/数学講師を経て、ベネッセコーポレーション入社。ICTを活用した新規事業開発に従事。島根県隠岐郡海士町にて、公立塾マネジメント、隠岐島前高校教育情報化担当。平成29年高知県土佐町に移住。NPO法人SOMA副代表理事に就任。嶺北高校魅力化プロジェクトを立ち上げ、公設塾での指導や嶺北高校CNを兼任。平成31年一般社団法人れいほく未来創造協議会事務局長に就任。令和3年北海道大空高等学校の学校長に就任

江森 真矢子さん

MAYAKO EMORI

高校CN ▶ 一般社団法人代表理事

泥臭く人間関係をつくり、
学校と社会を架橋する力は、
海外でもそのまま役立っている

現在、ブータン王国チュカ県にある学校で、現地の教員や教育省とブータンらしいPBL（プロジェクトベースドラーニング）を共創する仕事をしています。まさかブータンに来るとは思っていませんでしたが、声をかけられたのはCNのネットワークから、経験を買われて今ここにいます。

岡山県立和気閑谷高校では、探究学習のカリキュラム作成・運営から、総合型選抜講座対策、広報、海外交流、資金調達、学校運営協議会の運営まで多種多様なCN業務を行ってきました。加えて三重県立飯南高校でもアドバイザーに任命され、10年ほど高校魅力化に携わってきました。高校CNとは、言ってみれば異なる文化の間にある人です。泥臭く人間関係を構築し、学校組織や先生の現実に寄り添いながら、最適解を探っていく。すぐにうまくいくわけはないという達観と、少しうまくいって自分なりに生徒の成長や教育の質向上に貢献できているという実感を伴った喜びの間で、学校と社会、生徒とコミュニティを架橋する経験は、国際協力の現場でもそのまま役に立っています。

間に立っていると雲を掴むような、あわいの中にいる落ち着かなさがあると同時に、だからこその面白さがあります。高校CNは、白黒のはっきりしない状況を楽しめるようになるといいと思います。変幻自在に、融通無碍であろうとする意志は、困った時に出口をみつける役に立つような気がします。

えもり　まやこ
国際基督教大学卒業後、教育関連企業で私立学校の広報、学習プログラムの企画・運営等を通した魅力づくり支援に携わった後、リクルートに転じ教育専門誌の編集者に。その後、平成27年岡山県和気町で地域おこし協力隊として高校魅力化事業に従事する傍ら、フリーランスの編集者・ライターとして活動。平成31年、地域起こし協力隊卒業生仲間と、ひとづくりとまちづくりをテーマに活動するワーカーズコレクティブ、一般社団法人まなびとを立ち上げ、百姓的生き方働き方を実験中

COLUMN

学際的な学び、STEAM教育を推進する
高校CNに期待すること

高校CNの素朴な疑問や俯瞰的な視点が、専門分化した教科教育からの脱却を促す

VUCA[18]の世界を生きる子供たちが実社会の問題解決のプロセスを学ぶため、「STEAM教育[16]」など教科横断的な学びをカリキュラムに取り入れていく動きが進んでいます。特に、高校段階では、小・中学校での学びを基盤とし、現代社会における問題をより深く探究したり、問題と教科の学びとの間の関連性を見出しながら改善方法を検討したり、新しい解決方法を提案したりモノを創造したりすることが期待されています。

私はこれまで、STEAM教育を学校でいかに実現するかというテーマで研究を進めてきました。学校現場からは、STEAM教育に対する否定的な声が多く寄せられます。例えば、「自分の担当ではない教科のことはよく分からない。他の先生との協働は難しい」というものです。高校の教員は、自身の専門教科を教えることに多くの時間を割いており、他教科の教員と話す機会が少ないことが背景にあるようです。また、教科横断的な学びのあり方は、学問体系から専門分化した教科教育の観点から見えにくいことも理由に挙げられるでしょう。このような課題において、教科の異なる教員間のコミュニケーションを促したり、関連がなさそうな教科の教員同士をつなげたりする役割を担うのが高校CNです。細分化された教科教育の視点から脱却するには、専門的に学んでいない方からの疑問や俯瞰的な視点が重要となります。

上記に加え、「学際的な学びを実践したくても時間が足りない。教員がすべての生徒を見ることができない」という声もよく耳にします。「総合的な探究の時間」は、先に述べた学びを実践するために設置されている科目です。実際の教育現場において、探究的な活動をする十分な時間を確保することが難しいことはご承知のとおりです。

解決策の1つとしてあげられることは、教員が生徒の活動を指導しなければいけないという発想を捨て、生徒たちが主体的に学んだりお互いに協働したりする場をデザインするファシリテーターになることです。ある高校では、高校CNの発案で1年生から3年生まで共通して金曜日の午後に総合的な探究の時間を割り当てています。学校全体が共通した時間枠を設けることによって、高校3年生が高校1年生の授業に参加して自分たちの経験を発表したり、クラスや学年を超えたプロジェクトチームを構成したりすることも可能になります。加えて、教員も協働で授業を実施することが可能になります。このような事例では、高校CNは、教科学習から一歩引いた視点で教員の意識を変容させたり、学校全体の活動の枠組みをデザインしたりする役を担うことになるでしょう。

以上のように、高校CNは組織改革における「トリックスター[19]」として自身の異質さを自覚しながら、専門分化した組織をいい意味で「かき回し」たり、教員を陰ながら支えたりする役割を担う人材です。学習者として学び続ける姿勢を持っていれば、学問体系を俯瞰することは難しいことではありませんし、学校におけるカリキュラムの構成のあり方や学校の仕組みについては参与観察をしながらご自身の理解を深めていくことができるでしょう。自身がこれまで関わったことのない領域でも積極的に人的なネットワークを作ることができる傾聴力や知的好奇心を持ち、新しいイノベーションを起こす、そんな高校CNを期待しています。

もりた ゆうすけ **森田 裕介**

早稲田大学人間科学学術院人間科学部教授。専門は科学教育、教育工学。STEAM教育をテーマとし、小・中・高・大においてテクノロジーを活用した学びのデザインに関する研究を行っている。

YUSUKE MORITA

COLUMN

地域と学校の協働を推進する
高校CNに期待すること

高校CNは“あなたの学校の地域”づくりを促進し、多様性を学校に運び込む存在

地域と学校の協働に関して頻繁に頂くご質問の中で、2つほど回答に困る質問があります。

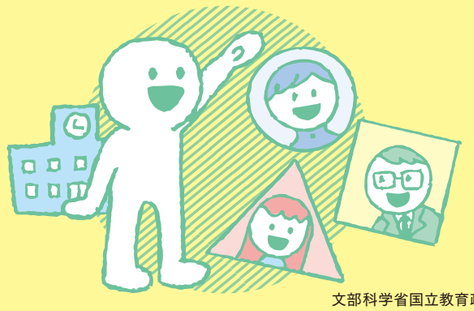
1つは「地域とは誰のことですか」というものです。学校は比較的イメージしやすいようですが、それに対し地域というものは、とても曖昧です。とくに高等学校の場合、広域から生徒が通学してくるため、小・中学校のようにイメージできないといった声もよく聞きます。また、学校との連携に負担や不満を感じている方からもこうした質問が投げかけられることがよくあります。

そんな時私は、「あなたの学校の子供たちに愛情と想いをもって、その成長に関わりたいと思ってくれる人を見つけ、増やし、つないだネットワークを『地域』と呼んで、年月をかけてそれを少しずつ広げていきませんか」と、提案することにしています。

地域と学校（特に高等学校）の協働における地域とは、地理的な条件ではなく、生徒を育て合うという意識をもつ人、企業、団体どうしのネットワークと捉えた方が、わかりやすいように思います。そして、高校CNには、“あなたの学校の地域”づくりを促進するという視点から、地域の方々との関係づくりを広げ、深めていっていただきたいのです。高校生の学びの場に参加し、つながりをもつことは、単なる高校生のための活動でなく、個人・企業・団体の活力と恩恵を生み出す取組でもあるということや、ここに集う善良な大人どうしの横のつながりを強化することを意識しながら、日々のコーディネートに取組んでほしいのです。それが、「よりよい教育を通じたよりよい社会づくり」の1つの姿だと思うのです。

もう1つは、「先生のお手伝い・応援じゃ、なぜいけないのか？」といった質問です。日々の暮らしを営む人は誰もが多忙であり、なるべくなら役割や責任を避けたいという気持ちになるのは当たり前のことだと思います。また、生徒と関わる経験が浅い場合、自らが適切な役割を担えるのか不安に感じる地域の方は多く、こうした類の質問がよく出ます。

そんな時に私は、「先生の代わりになる必要はなく、先生でも親でもない地域の大人だからこそできる役割を果たすために、学校に関わってください」と、お願いすることにしています。生徒にとって身近な地域の中で、信頼できる大人と出会ったり、多様な関わり方をしたり、自分の居場所を見つけ出したりする経験の蓄積は、不確実で先行きの見通しが難しくなった時代を生き抜くための資源として、今後ますます注目されることでしょう。例えば、偶然起きる出会いや出来事に積極的に関わり、自らの人生に生かそうとする（プランドハプンスタンスP.39参照）姿勢などは、キャリア教育の考え方の主流になりつつあります。これは、地域の大人だからこそ提供できる学びの形の1つです。またこうした偶発だけでなく、意図的にも、もっともっと異文化や多様性を学校に運び込む必要があると思うのです。その筆頭として、何より高校CNが存在感を発揮してほしいと願っています。



ししだ まなみ **志々田 まなみ**

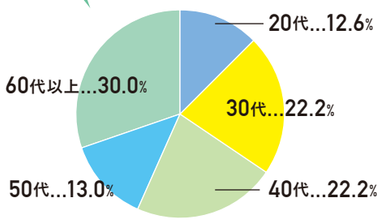
文部科学省国立教育政策研究所生涯学習政策研究部総括研究官。専門は社会教育学、生涯学習論、成人教育学。学校・家庭・地域の連携・協働をテーマとし、学校運営協議会や地域コーディネーター等に関する調査研究に継続的に関わっている。

MANAMI SHISHIDA

データでみる高校コーディネーター

▶ 高校CNの年齢構成

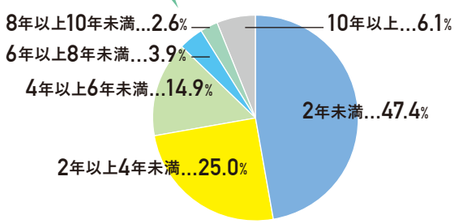
幅広い年齢層が活躍



※n=230、無回答を除いた集計結果

▶ 高校CNの通算勤務年数

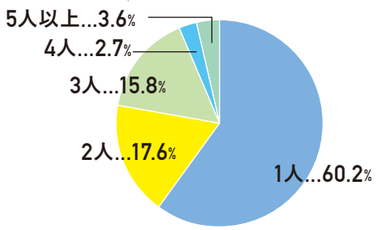
約半数の高校CNが経験年数2年未満の「新しい職業」



※n=228、無回答を除いた集計結果

▶ 勤務校のCN数

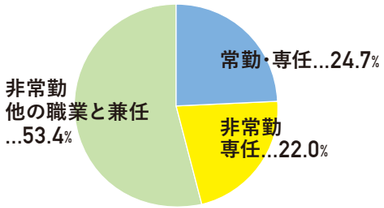
1人で高校に配置されている高校CNが約6割



※n=221、無回答及び「0」と回答したものを除いた集計結果

▶ 勤務形態

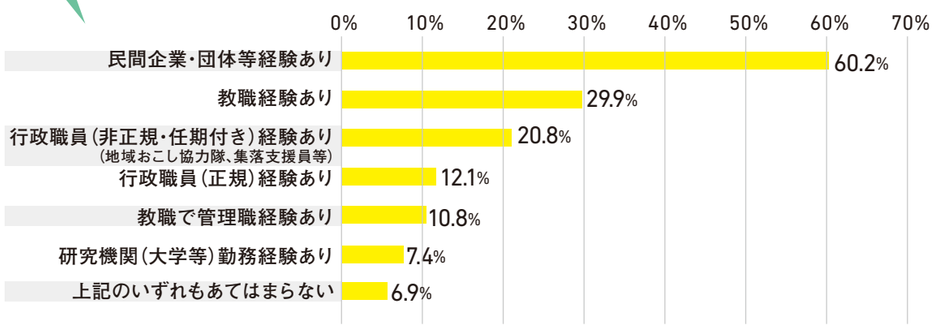
高校CNの勤務形態は、「非常勤・兼任」が過半数



※n=223、無回答を除いた集計結果

▶ 高校CN以前の職務経験

前職＝民間経験者が約6割、教職経験のあるCNは約3割



※n=231、複数回答可
※現在兼任している場合も含む

CHAPTER 3

第3章

高校コーディネーターの職務と期待される力

高校CNへのアンケートでわかった高校CNの課題や悩み第1位は「期待される役割が曖昧、不透明」でした。本ガイドでは、標準的な高校CNの職務と期待される力を整理しました。高校CNに必要とされる力は、学校改革の段階や補完関係にある教職員等の状態、職位によって変化します。何をもって高校CNが専門職であると言えるのかを明確にすることは、過剰な期待や過小評価を避け、適切な職務を遂行し、能力を発揮できる土台になります。

高校コーディネーターの
標準的職務

高校CNの職務に関する先行研究となる「『高校と地域をつなぐ人材の在り方研究会』報告書」（令和3年）では、社会に開かれた教育課程と地方創生の実現に向けた「コーディネート機能」について整理しています。本事業では、同報告書を参考にしながら、高校CNの職務の整理を行いました。

POINT 1

2つの領域

社会に開かれた教育課程を実現するには、カリキュラムの実施のための外部人材や機関との連携・協働を行うと同時に、そのカリキュラムを実施可能にする協働体制づくりも行う必要があります。それぞれの領域を「教育・探究に関するコーディネート」「経営・協働に関するコーディネート」の2つの名称で設定しました。

専門職務と補完職務

高校CNがどのような職務を遂行するかは、高校CN本人の力量に加えて、協働する教職員や地域・社会の関係者によって変化します。本ガイドでは、教職員の専門職務と地域側が担える職務を除いた職務を高校CNの専門職務としました。本来、教職員や地域側が担う職務に関しては高校CN補完職務としました。

POINT 2

POINT 3

職位

「『高校と地域をつなぐ人材の在り方に関する研究会』報告書」では、コーディネーターの職位を役割レベルによって大きく3つに分類しています。本事業でもこの職位分類を踏襲した上で、専門職として目指すレベルをプレイヤークラス以上としました。

- **マネージャークラス**　課題を設定し、解決の枠組みを整え、全体を統括する
- **プレイヤークラス**　設定された課題に対して、計画を立案・実行・改善する
- **サポータークラス**　現場に寄り添いながら、計画の実現を支援する

“コーディネーターズ”という考え方

高校CNによってそれぞれ得意不得意があり、なんでもこなせるスーパーマンを求めることはできません。すべてを高校CNが担うのではなく、職位の違う複数のCNや教職員で役割分担をしてコーディネート機能を担うという「コーディネーターズ」という発想も効果的です。

POINT 4

高校コーディネーターの標準的職務

領　域	専門職務/補完職務	職務内容	職務内容の例
教育・探究に関するコーディネート	専門職務	社会に開かれた教育課程における外部機関等との連携・協働	1 総合的な探究の時間や学校設定教科・科目等における、外部機関等との連携・協働 2 総合的な探究の時間や学校設定教科・科目等に関連した、生徒の自主活動や課外活動における外部機関等との連携・協働
		学校外の学習環境、活動機会への接続	1 社会教育施設や社会教育関係団体、民間団体・企業等との調整・協議 2 生徒のボランティア活動や社会教育プログラム、海外留学等への参加調整・接続
	補完職務※	社会に開かれた教育課程におけるカリキュラム・マネジメント、推進支援、企画立案・運営支援、生徒伴走支援	1 カリキュラム・マネジメント推進のための体制構築、年間指導計画、評価方法の策定支援 2 下記の項目における企画立案・運営支援 総合的な探究の時間や学校設定教科・科目／キャリア教育／特別活動（生徒会活動、学校行事、修学旅行、研修旅行等）／特色ある教育課程を実施するための教員研修／チーム学校を実現するためのチームビルディング等 3 総合的な探究の時間等における生徒への伴走支援
		学校外の学習環境、活動機会の開発支援	1 生徒が参加する学校外の学習や活動の開発支援（例：塾の設置、キャンプ等、社会教育プログラムの開発支援） 2 地域留学生の生活支援 3 地域人材の発掘・育成・活用の仕組み構築支援
経営・協働に関するコーディネート	専門職務	地域や社会の外部機関等との協働体制の構築と運営	1 高校と外部機関や人材（地域人材や企業人、卒業生等）との協働体制（コンソーシアム、学校運営協議会等）の構築・運営 2 共通ビジョンや事業計画の策定 3 定例会議、ワークショップの企画・運営
		外部機関や人材との連携、教育資源（人材・資金等）の確保	1 外部機関や人材等、教育資源の発掘、連携・協働（例：大学、民間企業、他地域・海外の団体、専門家、大学生、社会人インターン、ボランティア等） 2 寄付金や助成金等の外部資金の獲得、活用
	補完職務※	学校の特色化・魅力化に関わる情報発信・共有支援	1 学校教育方針や活動等の発信 2 生徒募集活動の企画立案、運営支援

※補完職務：他の専門職との適切な連携・分担の下、その専門性を生かして参画することが想定される職務

高校コーディネーターに期待される力

先行研究の調査、高校CNへのインタビューやアンケート、普通科改革支援事業指定校へのインタビューを通して、高校CNに期待される力を整理・分析しました。加えて、近接職種である教員と社会教育主事の資質能力及び養成課程を参考にし、高校CNに期待される力を「能力」「知識」「資質」の3項目で整理しました。

コーディネーターとは、縦割りでは解決できない問題を越境的協働で解決する人

近年「〇〇コーディネーター」という職業や役割を耳にすることが増えています。その背景には、1つの組織や分野だけでは解決できない問題や課題の増加があります。お互いに持っている資源（人材や資金、ノウハウなど）を持ち寄り、組み合わせることで問題を解決していくことが、学校現場はもちろん、さまざまな分野で求められています。連携・協働と言うは易しですが、違う組織や文化に属する人が、自らの組織の枠を越えて協働するということは、それぞれの規範やルールが違うことに加えて、連携・協働先の探索、連携・協働のためのビジョン共有や双方のメリット設定、プロセス合意など、コミュニケーションに相当な時間と労力がかかります。そこで必要になってくるのがCNです。

高校CNの力の中核は、コーディネート能力

高校CNに行った調査において、職務を遂行する上で必要な力を聞き取りました。それらを能力、知識、資質で分類し、さらに高校CNの2つの職務領域である「教育・探究に関するコーディネート」と「経営・協働に関するコーディネート」のどちらの領域に関連するかを整理しました。

分析を通して見えてきたのが、2つの職務領域に共通して必要な力としての「コーディネート能力」でした。また「教育・探究に関するコーディネート」では「ファシリテート能力」が、「経営・協働に関するコーディネート」では「マネジメント能力」が、それぞれの職務に特に必要な力であることがわかりました。同様に高校CNに必要な知識も2つの領域に分けて設定することができました。

また、上記の能力や知識を機能させていく土台になるのが、「資質」です。越境した先の組織や文化を理解し、生徒に探究学習を促すためには「探究性」が、多様な主体に協働を促すためには自らにも「協働性」が必要です。新しい職業である高校CNだからこそ、主体的にビジョンを持って課題を設定し、自ら仕事を作る力、「アントレプレナーシップ」が重要になります。

高校CNとして活動を重ねる中で、身についていく力

これらの力がないと高校CNができないわけではありません。高校CNとして日々活動することによってこそ、必要な力が身に付くものです。また、仕事はチームで取り組むものです。足りない部分は「コーディネーターズ」で補いながら、自らの力を高める「探究」も続けることが大切です。

高校コーディネーターに期待される力

教育・探究コーディネート　　**経営・協働コーディネート**

能力

- **ファシリテート能力**
  - ・伴走力
  - ・学習環境設計力
- **コーディネート能力**
  - ・情報収集・発信力
  - ・信頼関係構築力
  - ・ネットワーキング力
  - ・アレンジ力
  - ・協働体制構築力
- **マネジメント能力**
  - ・課題分析、課題設定力
  - ・企画立案力
  - ・課題解決力
  - ・組織開発支援力

知識

- **教育・探究コーディネートにおける基礎知識**
  - ・教育の理念と教育史
  - ・カリキュラム・マネジメント
  - ・総合的な探究の時間　等
- **経営・協働コーディネートにおける基礎知識**
  - ・協働とコーディネート
  - ・協働体制の構築と運営
  - ・地方行政の仕組み　等

資質

- 探究性
- アントレプレナーシップ
- 協働性

コーディネート能力

高校CNの専門性の中核とも言える能力がコーディネート能力です。「情報収集・発信力」と「信頼関係構築力」「ネットワーキング力」は相互に関係しており、この3つの力を基盤に、「アレンジ力」が発揮され、「協働体制構築力」が高まると考えられます。

#キーワードと高校CNの声は、高校CNへのインタビューやアンケートの中から出てきた、高校CNに必要な力を表す言葉です。高校CNに期待される力を具体的にイメージする際の参考にしてください。特に、強調表示している言葉（主に専門用語・学術用語）については、自学を進める際の検索キーワードとしてもお役立てください。そのうち一部は、P65に注釈を設けていますので参考としてください。

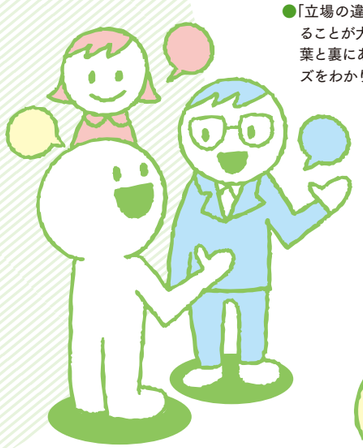
信頼関係構築力

#相手へのリスペクト #チームで働く
#お誘い上手 #素直に頼る #ラポール

信頼関係を心理学用語で「ラポール」といい、**お互いが安心し頼りにしあえる状態**を表しています。そのためにもまずは相手を**リスペクトする姿勢**が基本です。信頼関係構築の第一歩として、自分の得手不得手を発信、次に**素直に頼る**ことが大切です。相手の得意なことや好きなこと、やりたいことを理解し、力を発揮しやすいところから頼るとうまく行きます。複数人での信頼関係構築やチームとして機能させたいときには、**チームビルディング**[20]という手法を使うことも効果的です。信頼関係構築にはある**一定の対話量**が必要です。時間を惜しまず「関係の質」を高めることで、それぞれの役割や能力を発揮できる協働体制につながります。

高校CNの声

- 「先生が持っていないスキルを持っていると頼りにされます。例えば、ICT関連や動画制作などの技術は役立ちます」
- 「地域の祭りに参加するとか、ロジックを超えた人間関係は大切。そこから逃げると信頼されません」
- 「自分のやりたいことばかり言っていると、信頼関係の足場は崩れます」



高校CNの声

- 「立場の違う人が理解できるように、翻訳することが大切。そのためには、相手の表の言葉と裏にある本音を聞き出し、こちらのニーズをわかりやすく伝える力が必要です」

情報収集・発信力

#聴く力（じっくり聴く、共感して聴く、質問して聴く、要約して聴く）
#ヒアリング #調査・検索 #伝える力 #翻訳 #PR #他者目線
#知らない人に電話やメールできる度胸 #自己開示

情報収集には、**書籍やWEBなどでの検索能力**はもとより、チームとして働く教職員や地域住民の方々、支援対象である生徒等から、情報を聞き出すための**傾聴やヒアリング等の聴く力**が重要です。高校CNに着任したら、最初に**まず聴く力を高め情報収集に努める**ことをお勧めします。そして、集めた情報を**学校や地域・社会のニーズに合わせて整理し、発信**してみましょう。発信方法も口頭や紙媒体、SNSなど、さまざまな方法を組み合わせ、**相手に合わせて効果的に**行うことが必要です。文章やグラフィックデザインなどの**表現力のスキルアップ**も発信力向上につながります。自校の取り組みとともに**高校CN自身の人となりも伝えていくこと**で**信頼関係構築**につなげていけます。

アレンジ力

#翻訳 #WIN-WINの関係
#プロデュース #互酬性

教員や地域・社会の方々からのニーズに対して、自分が持っているネットワークの中から適切な資源をつなぎ合わせる力です。つなぎ合わせる際、**相手にわかる言葉でニーズを翻訳**することに加えて、**双方にメリットがあるように互酬性を担保**することが重要です。例えば、大学生や社会人に高校生の探究学習のサポートを依頼したい場合、傾聴の仕方やアドバイスのコツなどを**事前にレクチャー**することで、アドバイスの質も高まり、サポートする側の安心感や達成感につながります。**どのような人を、どのような場面で、どのような役割で投入し、どのような準備が必要**か、**目的と互酬性を忘れずに設計**していくことが大切です。

高校CNの声

- 「高校CNはプロデューサーのようなもの。ゴールに対して、どういう資源が必要で、どういう人と協働した方がいいのか考え、資金調達も積極的に行う人です。全体のスケジュールを引いて進行管理を行うようなスキルも求められます」

ネットワーキング力

#外部の視点をもたらす #ネゴシエーション #多少の図々しさ
#お願い上手 #懇親会 #多様なコミュニティへの参加
#営業力 #弱いつながり #ソーシャルキャピタル

ここでいう**ネットワークとは人と人とのつながり**のことを意味します。ネットワーキングには、**高校CN自身がつながりを広げていく**ことと、**つながった先と学校や生徒などをつなげていく**ことの2つがあります。前職やこれまでの経験によって培われた**学校が持っていないネットワークは高校CNとしての強み**になります。さらにネットワークを広げていくには、**アンテナを立て、出会いを創出する習慣**も大切です。人と人とをつなげていくためには、**お互いのニーズが重なるところ**を見つけて（＝フレーミング）、双方にメリットと役割を語れる力が必要です。

高校CNの声

- 「あの人のところに行ったほうがいいぞ、とつないでもらえる信頼関係が重要」
- 「特に用事がなくても行く。『今、忙しいんだよ！』と言われても平気な打たれ強さが大切」

協働体制構築力

#民主的公平性の担保 #ニーズ開発 #生態系 #ビジョン共有
#会議設計・運営（全体設計、依頼書・議事録作成等） #利害調整
#チーム学習 #動機付け #ワークショップデザイン
#参加のデザイン #合意形成

協働とは、同じ目的・目標のために、立場の違う人が対等に、それぞれの特性を生かして協力し合うことです。「学校支援」を超えて、協働体制を構築するためには、「〇〇さんに頼まれたから」という**属人的な協働から脱却し**、自らの「務め」として**主体的に活動に関わっていく人を組織化**することが必要です。そのためには、**協働のためのファシリテーション力**（参加のデザイン、ビジョン共有、合意形成、チーム学習、動機付け等）を発揮しながら、**持続可能なネットワークを構築**していきます。時には、人間関係を含めた調整力が求められます。トップダウンとボトムアップを組み合わせ、**誰が動くと物事が進むかを見極める高度な能力**でもあります。

高校CNの声

- 「協働体制を作ろうという時に制度的背景を知っていることが大切。規約をきちんと読んで、年に何回会議するとか、組織の責任者はどう置くかという視点も必要」
- 「地域の人に、地域は学校と協働して子どもたちを育む一員なんだ、ということをいかに理解してもらうかが肝」

能力 Ability

ファシリテート能力

生徒（学習者）を主語にした「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に向けて、ファシリテーション[21]や伴走という言葉が、教育現場で多く聞かれるようになりました。学びの主体は生徒であり、目標の設定から学びの過程まで、包括的に支援し、最終的に生徒自身が自走できることを目指します。

伴走力

#問いの力 #フィードバック
#カウンセリング #コーチング #キャリア教育

ファシリテート能力のうち**生徒に対して発揮する力を伴走力**としました。総合的な探究の時間の目標に「自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していく」とあるように、**生徒を主語**にしながら、**各生徒固有の学習方法や進度に寄り添い**、探究的な学びに伴走していくことが求められています。伴走と言っても、生徒の状態やプロジェクト等の局面によってそのあり方は変化します。時には寄り添い勇気づけを行うメンター、時には型を与えるインストラクターといったように**アプローチ方法は複数**あります（コラム参照）。また、1人ですべてを担うのではなく、**適材適所で教員と高校CN、地域や社会の方々と役割分担**をすることで、生徒に必要な支援を充足させることができます。

高校CNの声

- 「伴走力は着任後でも身につけることができます。力をつけるためには、ロールモデル[22]を見つけることが大切。一方で、コーチング[23]やフィードバックなど、すでに研究が進んでいる分野を理論的に学ぶことも役に立ちました」
- 「伴走力は、生徒に対してだけではなく、実は先生に対しても発揮できます。先生が実現したいことを読み取って、さっと支えるのも高校CNの醍醐味です」

学習環境設計力

#協働ルーム等の空間設計 #掲示物 #司書との協働
#学外での学習機会への接続
#ワークショップデザイン #越境学習への接続

学習環境設計力とは、探究学習プログラムの設計や空間設計、探究機会創出など、生徒が**主体的・能動的に学びに向かうことができるための環境づくり**ができる力です。スクール・ポリシーなどの各学校の教育目標に合わせて、学校と外部の教育資源とつなげる**高校CNの働きそのもの**が学習環境設計力と言えるかもしれません。一方で、探究学習は授業内だけで完結するものではありません。休み時間に目にする掲示物や図書室で紹介されているお勧めの本、放課後に出会える地域の方々、学外のイベントや学習機会の紹介など、多方面から**生徒の探究心や挑戦心に火をつける環境づくり**が大切です。

高校CNの声

- 「生徒自ら探究したくなる環境の設計やインターフェースのデザイン、誘導の仕方などは、ゲームからも学ぶことができます」
- 「社会人大学院での学びが役に立ちました。デザイン思考[24]の手法などを学び、自分観察を通して見つけた課題をどう解決するのか、リサーチクエスチョンを立て、社会実装していくところまでをやりました。生徒の立場を経験することが生徒理解にもつながりました」

COLUMN

一歩踏み出すための足場かけと伴走者の役割

横山 和毅さん

（認定NPO法人カタリバ／福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校学校支援統括コーディネーター／双葉みらいラボ 拠点長）

探究学習における伴走者の役割とは、レフ・ヴィゴツキーの言う「発達の最近接領域」における足場かけだと考えています。「自力でできること」と「まだできない」の間にある「誰かと一緒ならば、支援があればできる領域」において、どのように支援するかということです。ふたば未来学園では、支援方法は探究学習のフェーズによって変化すると考え、『4つのロールと23の関わり』を作成しました。これを再度整理し5つの役割にまとめたものが右記の表です。探究学習では生徒の進度や意欲には大きな開きがあります。教員と高校CNで話し合い、今この生徒にはどのような支援が必要か分析し、アプローチ方法を決めています。

メンター	寄り添う 勇気づけ	生徒の言語化の支援や、生徒が不安に感じている際の承認・勇気づけなどを行う。生徒の主体性を大切にし、それを引き出す姿勢。
インストラクター（ティーチャー）	教える 型を与える	伴走者の経験から知っている知識や情報の補充を行う。また調査や計画の仕方など、学び方の型を与え、生徒が活動を自身で進めるために必要な足場かけをする。
ファシリテーター	引き出す 問いかける	アイデアや振り返りなど、生徒が考えていることや感じていることについて、思考を深めることや言語化することを促す。
コラボレーター（ジェネレーター）	視座を上げる 背中を見せる	あえて実際に一緒に取組む姿を見せることで活動のイメージを持たせたり、成果物の期待値を共有することで、生徒の活動への姿勢を作る。
コーディネーター	つなげる 出会わせる	生徒の興味関心に沿って、地域や専門家など外部の人と出会うきっかけをつくる。また生徒自身がアポイントメントを取る際や、インタビューなどの計画立案の支援をする。

能力 Ability

マネジメント能力

主に経営・協働コーディネートに関する能力であり、マネジャークラスには必須の能力です。その多くはポータブルスキルと呼ばれ、業種や職種が変わっても持ち運びができる職務遂行上のスキルです。コーディネート能力を下支えし、目的を達成するためにも必須の能力です。

課題設定力

#論理的思考 #批判的思考 #水平思考 #データ分析 #問いを立てる力
#システム思考 #デザイン思考 #ダブルループ学習

課題設定力とは、**今、何をすべきか自ら考え出す力**です。課題設定するためには、①**現状とあるべき姿**（目的・目標）を明確にし、②現状があるべき姿になるのを阻む要因＝**問題を発見・分析**し、③**取り組むべき事項（＝課題）を決定する**力を必要とします。はじめて高校CNを受け入れる高校では、高校CN自らが何をすべきか考える必要がありますし、学校改革開始から時を経た高校では、手段が目的になっていないかなど、課題設定を繰り返しながらよりよい学校を作っていく必要があります。

高校CNの声

- 「システム思考[25]を学ぶことで、学年や学級という狭い範疇で問題を捉えるのではなく、原因は複数あり、つながっているという包括的な視点を持つことができました。学校も連鎖構造の中にあるという視点を持つことが大切です」
- 「問いを立てる力。高校改革という新しいことをしようとしているわけですから、自ら何をすべきか、高校CN自身が考える必要があります」

企画立案力

#編集力 #仮説設定 #データ活用 #ストーリーを描く力
#プロジェクトデザイン #プロトタイピング

企画立案力とは、**目標達成や問題解決に向けて計画を立てる力**のことです。新しい企画やアイデアは、**既存のアイデアの掛け合わせ**と言われます。日頃からさまざまな知識や事例に触れ、頭の中にたくさんの**アイデアの種になる材料を蓄え、思考の枠組などを活用**することで、生み出すことができます。また、生まれたアイデアを多くの人が理解できるように、実現する方法を**企画書にまとめる力**も大切です。簡単な企画書を作成し、周りの人から**フィードバック**をもらうことで、よりよい企画に成長させることができます。

高校CNの声

- 「ロジックモデル[26]を自分で作って叩いてみる経験は必要だと思います」
- 「プロトタイピング[27]していく力。何か企画を立てて高速でPDCAを回す。やってみないとわからないことが多いから、まずはやってみようと踏み出す力も大切なんじゃないかと思っています」

課題解決力

#戦略的発想 #外部資源調達力 #仕組みづくり
#事務局の運営・経営 #組織化
#プロジェクトマネジメント #マーケティング

よいアイデアが浮かんでもそれを実行しなければ、課題解決できたとは言えません。課題解決方法の1つである**プロジェクトマネジメント**[28]は、**スケジュールや人員、予算、物的資源、情報などを総合的に管理する手法で、国際標準規格**もあり、さまざまな場で学ぶことができます。チームや組織で取り組むからこそ、コミュニケーションの取り方や情報共有のスキルなど基礎的なビジネススキルも重要になってきます。

高校CNの声

- 「指示命令系統に従うとか、納期を守るとか、これをやると失礼だよねとか、一般常識を身につけておくことは、基本だと思います」
- 「長期インターンシップを計画した時に、高校CNがやっている仕事の多くは、事業所開拓つまり営業活動だったんです。職人さんや小さな会社さんがわかるように、学校が考えていることを翻訳して伝え、受け入れてもらう実行力が必要でした」
- 「開発や営業をやっていたので、費用対効果や、財源確保、プロジェクトの成果を次にどう投資するか、この期間で納期に収まるのかなど、前職の経験が役に立ちました」

組織開発支援力

#働きかけ力 #教員との協働 #土壌づくり
#人材開発・組織開発 #プロセスコンサルテーション

「いかなる問題も、それが発生したのと同じ次元で解決することはできない」とはアインシュタインの言葉ですが、問題の原因に自分たち自身のあり方や習慣がある場合、その解決のためには組織内の関係性や相互作用に働きかける組織開発が必要です。この考え方は令和4年に改訂された『生徒指導提要』が、生徒指導体制の充実には、教職員個人の生徒指導に関する知識等の向上だけではなく、学校の継続的改善を求めている点にもみることができます。CNは教職員とは異なる立ち位置にいるからこそ、学校の組織開発において大きな力を発揮できる可能性があります。

高校CNの声

- 「学校組織の中での意思決定のパワーバランスや構造を見極める力、学校文化ができていく過程の歴史を理解することは大事。先生たちが変えたいと思ってるけど変えられないことなど、裏側を理解した上で、どう振る舞うのかが必要です」
- 「高校の先生は個業化しやすいことが知られています。いかにチーム学校になっていくか、新しい仕組みをつくって機能させるかには、組織開発の知識やスキルが役立ちました」

知識 Knowledge

教育・探究コーディネートにおける基礎知識

高校CNが身につけるべき基礎的な知識を、2つの職務領域に分けて設定しました。教育・探究コーディネートにおける基礎知識では、はじめて学校現場で働く人が知っておきたい学校教育の知識を中心に、今日的な課題について取り上げました。

高校CNへの調査で挙げられた高校CNに必要な知識を、大学などで行われている教員養成課程の必須科目に照らし合わせ整理しました。教職経験のない高校CNでも、教職員と協働する際に知っておきたい内容になっています。

日本ではほとんどの人が学校教育を受けてきた経験があるため、自己の経験を土台にした教育論を語りがちです。**高校CNは「自分がやりたい教育を行う」ために存在するのではありません。スクール・ミッション、スクール・ポリシーや学校教育目標を踏まえ、未来を見据えて、今ここにいる生徒たちに身につけてもらいたい資質・能力は何かを、教職員はもちろん地域や社会のみなさんとともに共有し、学びをつくっていくことが大切**です。

そのためには、過去から未来につながる時間軸での現在地を理解し、生徒を主語にした学習とは何か、どのように学びを構築していくかなど、基礎的な知識を習得することで、教職員と対等に対話ができるようになり、さらには、地域や社会に点在する専門知との接続が可能になってきます。

高校CNの声

- 「民間企業とは全く異なる学校ならではの文化や先生方の考え方を入職前に理解しておくことで、入職後、現場に早く適応し、高校CNとして活躍しやすくなると思います」
- 「探究とはなんぞやということについて、学習指導要領やさまざまな参考図書を読みました。特に創造性はどう発揮されるのか、内発的なものをどう探っていくか、授業の中でどう取り組めるかなどを意識的に学びました」
- 「『あの先生って部活には熱心だな』と思う場合にも、日本の学校教育における部活動の役割などを踏まえた上で、その先生と話ができるかは、すごく重要だと思います」
- 「長期の視点に立って『この地域はこの先どうなるといいか、どんな学びが必要か』『この子たちが生きる未来って、どんな社会になっていくのか』と考えるためには、世の中へのアンテナは必須です」

必要な知識の要素	キーワード
教育の理念と教育史	・教育基本法(教育の目的、生涯学習社会の理念等)　・教育史(時代潮流と教育改革) ・学習指導要領(社会に開かれた教育課程) 等
生徒の発達と学習理論	・こころの発達　・学習論／学習科学　・アクティブラーニング　・ICT活用
総合的な探究の時間	・探究のプロセス ・探究の高度化・自律化
カリキュラムマネジメント	・スクール・ミッション、スクール・ポリシー　・教科横断　・STEAM教育 ・カリキュラム・マネジメントの3つの側面
生徒指導	・生徒指導提要　・いじめ、自殺、不登校等　・チーム学校
特別支援教育	・インクルーシブ教育　・合理的配慮
キャリア教育と教育相談	・カウンセリング　・コーチング
学校経営と学校組織・文化	・学校組織／文化　・リスクマネジメント　・チーム学校

知識 Knowledge

経営・協働コーディネートにおける基礎知識

「授業づくりのために地域に協力をお願いする」「困っている学校を支援する」という発想を超えて、学校と地域・社会が対等な立場で協働できるように、持続可能な協働体制を構築するために必要な知識をまとめました。

特色・魅力ある教育活動を展開していくために、地域・社会や大学、企業などの外部機関との連携・協働が求められています。高校CNがコーディネート機能を個人で担うのに対して、**組織でコーディネート機能を担うのがコンソーシアムです。**学校管理職や教員、設置者(教育委員会等)の積極的な関与を得ながら、外部機関や人材とともに協働体制を構築し、運営していくことも高校CNの職務の1つです。

そもそもなぜ協働が必要なのかといった社会背景から、どのようなプロセスを踏み、どのような体制で協働が成り立つのか、協働体制構築における高校CNの役割は何かなどを学ぶことは、協働体制の形骸化を避け、「社会に開かれた教育課程」と「高校を核にした地域創生」を実現する基盤になります。また、協働体制を構築する際に重要なのが、参画する関係機関の特徴を理解することです。特に**地方行政の仕組みは、一般企業と違うため、どのように意思決定されるか、お金の流れはどのようなものか学ぶ必要があります。**

高校CNの声

- 「住民参画や住民自治といった新しい公共のあり方について知っておくことは大切ですね」
- 「高校CNも公務員になる場合が多いので、公務員とはどういう立場なのかを学ぶ公務員研修は役に立ちました」
- 「議会がいつで、次年度の予算はいつまでに考えるべきかなど、行政の動きを知ることは必要です。行政は民間ほど素早く動けません。高校で何かやろうとしても、県教委にお伺いを立てないと動き出せません」
- 「立地市町村の総合計画や各種行政計画の理解など、地域側がこの学校をどう位置付けたいのかの理解が必要です」
- 「国や民間の助成金や補助金をとってくる時に、学校にお財布っていくつあるんだろう?　お財布の管理はどうなってるんだろう?　と言ったお金の知識があると、学校のお財布よりも法人を作って、そっちにお財布を持った方がいいかもとアイデアが出せます」
- 「マニアックなところでは人事の理解。例えば担当者が3年目で、来年度はいないかもしれないことを想定しておくと、引き継ぎはどうするかなど考えることができます」

必要な知識の要素	キーワード
協働とコーディネート	・協働が求められる時代背景 ・協働論と学習論 ・共創　・学習する組織
協働体制の構築、運営 (コンソーシアム、学校運営協議会等)	・協働ガバナンス　・組織対組織の協働(大学、企業との協働) ・地域住民との協働(地域学校協働活動／ボランティアコーディネート) ・外部資源調達方法(人材確保と資金調達)
地方行政の仕組み	・都道府県教育委員会の仕組み ・基礎自治体の仕組み(首長部局、教育委員会、議会等) ・予算の仕組み　・公共政策、教育政策　・地域学校協働本部
地域と教育の魅力化	・地域創生 ・地域・教育魅力化論
事務局の運営・経営	・労務／法務／会計 ・法人化

資質 Qualities

資質

資質は、職務を実行する上で必要な人としての性質です。生まれながらの天性とも捉えがちですが、後天的に伸ばしていくことが可能です。

協働性

#寛容性 #他者視点 #中立性 #想像力 #共感力
#愛され力 #お願い力 #曖昧さを受けとめる
#メタ認知 #自己調整力

学校内外の多様な人々をつなぎ、連携・協働を進めていく高校CN本人もまた、協働性を持つ必要があります。**相手の背景を想像**し、**共感を持って相手を受け止める**ことで、**多様であることを創造性の源**にしていける資質であり、コーディネート能力と深く関係していると言えます。また、立場の違う人や組織をつなぐ時には、**互酬性の担保が必要**だからこそ、**自らは中立性を保ち、私利私欲で動かない**ことも肝心です。**自分を客観視**し、**自己調整していく力**も協働性の支えになります。ここまで読むと一見、完璧な人のように見えますが、思わず助けたくなる、**お願い上手の愛されキャラ**というのも協働性を備えた人です。

高校CNの声

- 「いわゆるひとたらし、愛嬌があることは大切です」
- 「学校の中に居すぎないというのも大切。壁を超えて飛び出していけることも大事」

探究性

#無知の知 #思考の癖 #自学自習
#学びのコミュニティ #アンラーン #リフレクション
#越境学習 #チーム学習

分野をまたいでつなぐことを職務とする高校CNだからこそ、**さまざまな分野への関心**が必要です。最初からすべての知識を持っていることは不可能であり、何か知らないこと、困ったことが生じたら、学びのチャンスと捉えることが大切です。**すべてのことから学ぶ謙虚**な姿勢は、**自分をアップデート**していく基本です。探究するためには、**自分が知らない、ということを知る「無知の知」から始まります。**教員や生徒、地域の方々との対話や、フォーラムやシンポジウムなどのイベントなどへ参加することで、学びの勘所を得られることもあります。また、**定期的に仲間と学びの場を設け、学びを言語化するのも有効です。**

高校CNの声

- 「学びに対する柔軟性は必要。先生や生徒の観察や対話を重ねていくことで、自分には見えていなかった事柄を学ぶことができました」
- 「文科省のメルマガを登録してます。国の動向を知るのも重要です」
- 「自分の中の教育の解像度を上げようと思って、いろいろなイベントに顔を出しました」
- 「当時はICTのことを学びたいなと思って、IT企業に突撃したりしました。行動力を持った探究力が大切！」
- 「そもそも探究のループを自分自身が回せないと、生徒を指導できないです」

アントレプレナーシップ

#志を立てる #ビジョン #セルフマネジメント
#自分で自分の仕事をつくるキャリア意識
#タフネス #レジリエンス #ネガティブケイパビリティ

アントレプレナーシップとは、**様々な困難や変化に対し、与えられた環境のみならず自ら枠を超えて行動を起こし、新たな価値を生み出していく精神**です。多様な主体との連携・協働が求められるからこそ、**自分の軸を持つことが大切**です。高校CNという仕事を通して、**どのような自分になりたいのか、どんな未来や社会を作りたいのか**といったビジョン、自分の仕事や環境を**自ら切り開くという職業意識、困難な状況にも折れない心**などが求められます。多くの人に囲まれながらも孤独やストレスを感じることが多いのが高校CNという職業です。**全国の高校CNとつながり、支え合う関係も確保**しましょう。

高校CNの声

- 「よりよいパフォーマンスを発揮できるようにするための環境さえも、自分で整える力が必要。全部与えられないとやらないの言う人ではなく、どういう環境があるとパフォーマンスが出せるか考えて、場合によっては外部から必要な資源を調達したりすることが求められます」
- 「先生でも地域の人でもない隙間を埋めるのが高校CNのポジション。隙間という曖昧な中で働くには、切り開く力が必要だと思います」
- 「時には、自分の仕事はここまで、と線引きする勇気も必要です」

COLUMN

［先輩高校CNが伝えたい！］

高校コーディネーターが大切にしたい姿勢

今回の調査で多くの高校CNが共通して大切にしている「姿勢」がありました。人と人、組織と組織をつなぎ、共通のビジョンを達成することが目的である高校CNだからこそ必要な3つの姿勢を紹介します。

【 縁の下の力持ち 】

1 黒子だけどビジョナリー[29]

多くの先輩高校CNが指摘した高校CNに必要な姿勢が、**黒子に徹する姿勢**でした。黒子とは、**相手のニーズを汲み取り、役に立つように振る舞い、そこに喜びを感じられる人**です。貢献意欲と似た欲求に承認欲求があります。「あなたのおかげです」という言葉は甘美ではありますが、その言葉をもらうことを目的にしないことが大切です。未来の姿（＝ビジョン）を描き、しっかり自分軸を持ちながらも、働く姿は黒子であること。高校CNならではの姿勢です。

#黒子力 #感情に流されない #生徒ファースト
#地域愛 #サーバントリーダーシップ

先輩CNの声

- 「最初は便利屋的に始まる」
- 「生態系づくりとか仕組みづくりを大切にしてます。自分がいなくても回ることに美学を感じられるかどうかが重要。あれ俺がやったんだ、が強い人は、あまりCNには向かないと思います。答えを教えたい人、答えを知っていることでマウントをとってしまう人も同様です」
- 「自分が不安定で、自分の存在意義を示すために若者に救いを求めている人は採用しないです」
- 「先生方の主体性を尊重しつつ、理論よりも感情的な部分で助けになるようなことを探しています」

【 鳥の目、虫の目、魚の目 】

2 複眼思考

鳥の目（俯瞰して全体を見る）、**虫の目**（近寄って細部まで注意深く見る）、**魚の目**（時流を読んで時間軸で見る）。高校CNには一点からではなく、常に複数の視点を持って物事を**多角的に見る姿勢**が求められます。**自分の思い込みや思考の癖は、物事の見方にも影響**を与えます。誰もが色眼鏡で世の中を見ていることを理解しながら、**本質は何なのかを探究する姿勢**が大切です。

#マクロの視点とミクロの行動 #共感力 #言語化
#抽象と具体の往還 #メタ認知 #本質看取

先輩CNの声

- 「自分の数歩先を歩んでいる人を見つけたり、少し後ろにいる人を見ることで、自分の現場を客観視することができます。ちょっと現場を離れてリフレクションする機会を作ることで、自分の現場の良さや、根っこの問題に気づくことができます」
- 「常にアンテナをはって身の回りのことを注意深く観察していました。発見したものをカリキュラムに落とし込むにはどうしたらよいかをいつも考えていました」

【 好奇心、持続性、楽観性、柔軟性、冒険心 】

3 計画された偶然性

計画された偶然性とは、J.D.クランボルツ博士が提唱した「プランドハプンスタンス」というキャリア理論の和訳です。博士によるとキャリアによい影響を与えるのは「偶然の出来事」であり、それを導き出す要素は**「好奇心」「持続性」「楽観性」「柔軟性」「冒険心」**の5つだといいます。実はこの5つは、本調査でも多くの高校CNが必要だと言及しているものでした。**日々の姿勢や行動のあり様が、素敵な偶然を引き寄せ**、成功に導く。**やらない理由を探すより、やれる条件を見つけ**て、さあ行動してみましょう。

#チャンスに気づく #ピンチはチャンス #ポジティブ #明るさ

先輩CNの声

- 「目の前のことをねばり強く、やっていると誰かが必ず見ているものです」
- 「頭にあることは全部やってみる！」
- 「遊軍的で曖昧でありながら力を発揮できる人がいることが、学校が型にはまりすぎず、柔軟に必要な手を打っていけることにつながると思う」
- 「多様な経験をしている人であることがいいなと思っています」

高校コーディネーター研修

本事業では、令和5年度、6年度の2年間を通して、普通科改革支援事業指定校を中心に全国の高校CNと希望する教職員、教育委員会職員等に対して高校CN研修の開発と実証を行いました。高校CNの基本的な力（プレイヤーレベル）の習得を目標に、高校CNコミュニティが形成されるよう学習者の関係構築も工夫しましたので、参考にして下さい。

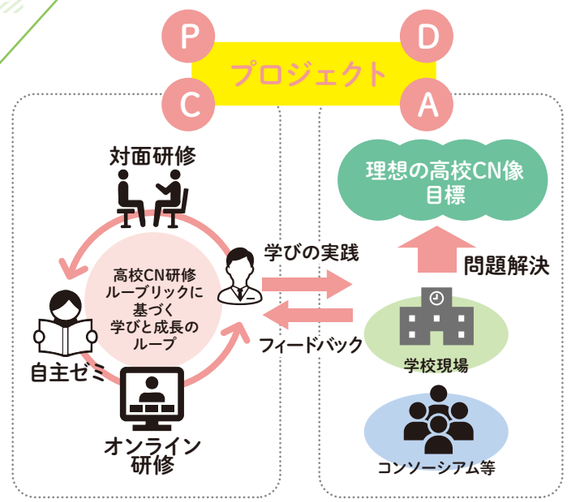
高校コーディネーター研修内容一覧

年度		タイトル／概要
R5年度	対面研修 1	「協働体制の構築の基本のキ」 ・オリエンテーション／チームビルディング／学習目標の設定 ・先輩高校CNに聞く
	オンライン研修 1	「社会に開かれた教育課程と協働体制づくり」 ・教育基本法における教育の目的と社会に開かれた教育課程 ・立地市町村と県立高校の協働体制構築事例
	オンライン研修 2	「総合的な探究の時間と新学習指導要領から進路へ」 ・総合的な探究の時間とは何か？ ・生徒の進路実現と総合的な探究の時間の関係性
	オンライン研修 3	「高校CNが知っておきたいカリキュラムマネジメント」 ・カリキュラムマネジメントとは何か？ ・教科横断型とは何か？
	対面研修 2	「環境デザインと生徒伴走」 ・学校のビジョンや目指す教育を実現するための環境づくり ・総合的な探究の時間の生徒伴走をメタ認知する
	オンライン研修 4	「VUCA社会に対応した持続可能な社会を創る」 ・学習と協働の往還による探究モードへの挑戦 ・協働ガバナンス
	オンライン研修 5	「学校と地域・社会の協働」 ・生涯学習社会における学びとは何か？ ・コミュニティ・スクール
	対面研修 3	「リフレクションは何のため？」 ・未来につなげるリフレクションの手法 ・1年間のふりかえり
R6年度	オンライン研修 6	「未来の兆しのつかみ方、つなぎ方」 ・未来から考えた高校生の学びづくり ・高校CNのキャリアデザイン
	対面研修 4	「プロジェクトデザインとワークショップデザイン」 ・現場の課題を解決するプロジェクトを作ってみよう ・ワークショップデザインの方法
	オンライン研修 7	「STEAM教育の実践」 ・STEAM教育とは何か？ ・STEAM教育を実践するための高校CNの役割
	オンライン研修 8	「高校CNが知っておきたい生徒指導とチーム学校」 ・改訂版『生徒指導提要』 ・生徒指導の観点から見た「総合的な探究の時間」の意義
	対面研修 5	「高校CN未来共創新聞」 ・デザイン思考×システム思考によるビジョンづくり ・ビジョンからはじめるプロジェクトデザイン
	オンライン研修 9	「地域学校魅力化論」 ・よりよい学校づくりを通して、よりよい地域・社会をつくっていく方法 ・地方行政のしくみ
	オンライン研修 10	「高校と企業の持続的関係性の構築」 ・企業との協働による外部資源の調達方法 ・高校と企業との関係性の深め方
	対面研修 6	「プロジェクト成果発表とリフレクション」 ・現場での課題解決プロジェクトの成果発表 ・2年間の振り返りと未来への対話

カリキュラム構成の工夫

プロジェクトによる研修と現場の往還

本研修では、学習内容のよりよい定着を図るために、2年目から現場の問題を解決する「プロジェクト」を学習者ごとに作成してもらい、より研修と現場の往還を意識する構成にしました。学習者全員が対面でのプロジェクトデザインの講座に参加できなかったため、プロジェクトの質やフォローアップの点で課題が残ったものの、何のために学ぶかを明確にする意義を再認識できました。



グランドルール

本研修では一貫して、学びに向かう態度として「Yes,and」「できない理由より、できる条件を」「アンラーン[32]」の3つを掲げ、学習者に意識づけを行いました。

Yes, and

【対話のキホン】
相手の発言を受け止め、自分の意見を加える

できない理由よりできる条件を！

【改革のキホン】
できない・やらない理由ではなく、できる・やるための条件を考えてみよう！

アンラーン

【学びのキホン】
自分の中の答え合わせではなく、自分の中の固定概念を見つけよう！

事前学習と事後学習

オンライン研修は2時間という限られた時間であったため、事前事後学習課題に取り組んでもらいました。自校の状況把握を目的に、校長や教職員、地域の方々などにヒアリングを行い情報収集をして情報整理をしたり、学習内容を現場でどう活かすかをまとめてもらいました。

学習ポートフォリオ

学習者の中で起きている「学ぶ」という営みは、オンライン研修では特に見えにくいものです。そこで、研修毎に自身の気づきや学びについて言語化してもらい、学習ポートフォリオとして一目でわかるものにまとめてもらいました。

学習者どうしのつながり

共に学ぶ仲間＝ラーニングコミュニティの形成を目的に、対話の時間やチームビルディングを通してつながりづくりを促進しました。また、学習者主催の勉強会や懇親会など、学習者の主体性を後押しする取り組みも行いました。

高校コーディネーター研修の成果と課題

高校CN研修の受講生に、研修を通して得られた効果と活かし方、今後の改善点を聞きました。高校CNはもちろんのこと、教職員や教育委員会職員など、それぞれの立場での学びや効果がありました。

FILE;01

グランドルールが行動指針。毎月の研修が、自分の現在地を知るマイルストーンになりました

神宮 一樹 ［高校CN／埼玉県立秩父高等学校］

「できない理由よりできる条件を」という研修のグランドルールに共感し、自身の現場でも指針としました。そのおかげで、現状を嘆いたり自分や他者を責めたりすることが減り、学校の先生や生徒とポジティブな対話ができていると感じています。研修では、全国の仲間の声や必要な知識をインプットしつつ、自身の活動を客観的にアウトプットすることもできました。月1ペースで自身の現在地を把握するマイルストーンとしてこの研修を活用できたことは、CN1年生の私にとって大きな支えとなりました。

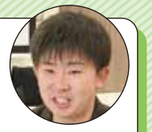
FILE;02

事務局長として研修に参加。研修の非公式な場でのつながりが、学校改革の一手になりました

的野 陽 ［事務局長／純真高等学校］

生徒減少に伴う学校改革が急務の中、本質的な探究教育ができれば選ばれる学校になるとの思いから、事務局長でありながら高校CN研修に参加しました。対面研修後の懇親会で、偶然同じテーブルになった他校の高校CNや講師の先生との出会いにより、学校ビジョン策定の研修やDXハイスクールへの申請ができました。「学校現場を知らない事務屋」と言われがちな立場ですが、研修を通じて、先生たちと対等に話せる知識と、本校に足りない外部の人材とのつながりを得ることができました。

FILE;03



全国から集まる研修だったから悩みを言える仲間と出会え、未来を考えるきっかけになりました

瀬尾 洋裕 ［高校CN／北海道岩見沢東高等学校］

学校教育も総探も何かも知らなかった自分が、「高校CNとはこういうものか！」と腹落ちできたのは、この研修のおかげです。先生方もまだ探究とは何か模索中で、自分が研修で得てきた知識が授業開発にも役に立っています。1人配置の高校CNは孤独ですから、この研修での出会いは支えになっています。時々オンラインで同世代の高校CN仲間とつないで相談しあったりしています。全国から多様な高校CNが参加されていることは、この場の価値だと思います。雇用形態や働き方の事例を知ることで、今後の自分のあり方を考えるきっかけにもなってます。

FILE;04

多様化する高校CNへのニーズに対し、教育委員会として、どのように配置し、研修を行うかが、次の課題です

［教育委員会事務局職員］

教育委員会職員として研修に参加しました。高校CNと学ぶことによって高校CNの役割を深く理解することができました。同時に、学習指導要領が示す、総合的な探究の時間や各教科・科目における探究的な学びを、いかに社会に開かれた教育課程の視点で実現していくかにおいて、高校CNの必要性もわかりました。一方で、高校の特色化・魅力化が進むことで、高校CNへの現場ニーズも多様化しています。今後、教育委員会や教育センターで同様の研修を担うことができるか、課題があると感じています。

学習者の声

- 「高校CNとは何かを知っている人は誰もいない状況で、この研修は、自分に与えられた役割を組み立てていく大きな羅針盤でした」
- 「探究が何かもわからなかったのが、回数を重ねるごとに理解が深まり、探究が好きになりました」
- 「講師とのつながりや実践事例を知ることで、実際の業務に生かすことができました」
- 「教員や教育委員会の方も参加されていたので、高校CN以外からの視点を生かした対話の場があってもよかった」
- 「事前課題をお互いにフィードバックする時間がもっと欲しかったです」
- 「学校に置かれる専門スタッフは10種以上あり、これらの専門スタッフとチーム学校を形成するにはどうしたらよいか考える学習活動があればよかった」

CHAPTER 4

第4章

高校コーディネーター活躍のための協働体制

1人ですべての職務を担ったり、すべての力を兼ね備え、学校の課題を1人で解決に導くような「スーパー高校CN」は当然ながら存在しません。高校CNも学校組織や地域社会の一員として、様々な協働関係の中でその力を発揮していくことが期待されます。高校CNと共に「活き・活かされる」関係性づくり、協働体制づくりが非常に重要です。本章ではこのような視点から、学校、教育委員会、地域・社会、そして各地のコーディネーター同士など、ビジョンの実現や課題解決に共に取組む協働関係者のあり方について、様々な事例や論点整理を通して考えていきます。

高校コーディネーターが活かされる協働体制の構築

高校CNの採用、配置、そして活躍に至るまでのプロセスでは、さまざまな関係者が協働して検討、調整を図り、それぞれの役割を果たしていく必要があります。例として都道府県立高校のCNを想定すると、主な関係者として、高校、その設置者である教育委員会、都道府県、市区町村、そして地域・社会の企業や団体が考えられます。それぞれが持つ役割や強みを発揮し、高校CNを取り巻くような形でネットワーク（右下図）を形成することが大切です。そのためのステップや、それぞれがネットワークの中で期待される役割についてみていきましょう。

高校改革の手段としての高校CN

高校CN本人へのアンケートによると、「高校CNの力を活かすために必要な条件や仕組み」について、半数を超える回答者が「学校の分掌・役割へのCNの明確な位置づけ」と回答しました。一方、高校を所管する教育委員会へのアンケートにおいても、高校CN（常勤・専任を想定した場合）を迎える高校に必要なこととして、「CNが担う職務の明確化」が突出して高くなっています。

とにかく高校CNを配置しなくてはと焦るあまりに、何のための高校CNかという視点を見失うと、手段と目的が逆転してしまいます。学校内での役割、仕事内容が明確に位置づけられないまま高校に配置されれば、教員は「何をする人なの？」「どの業務をお願いできるの？」、高校CNは「何をしたらいいの？」「誰と仕事を進めればいいの？」と、相互にお見合い状態になってしまい、協働が停滞してしまうことは想像に難くありません。

高校CN導入のスタートはスクール・ミッション、ポリシー

高校CN導入の検討は、自校のスクール・ミッションやスクール・ポリシーが出発点になります。高校の課題やミッションをもとに必要となる高校CN像を明確化し、CNに求められること、また受け入れ側の学校に求められることを整理する必要があります。これらの作業を左下の図のように5つのステップにまとめ、P46から2校の具体例も示しています。またP52からは、各ステップでどのような事項を検討すべきかをチェックリストで確認できるようにしました。高校CN導入にあたり、あらかじめすべてのチェック項目の検討が深められている必要はありません。自校にとって必要な高校CNの役割、採用条件、雇用条件、さらには、受け入れのための準備等の整理に役立ててください。

【高校CN採用・配置・活躍までの5ステップ】 5Step

Step 1 学校経営の計画立案

高校は、設置者である教育委員会の指導・助言を受けながら学校経営や改革に関する計画を立案します。学校の実情に基づき、必要な人的リソースについても検討し、こうした中で、高校CNの必要性が明確化されてくる場合があります。また、高校が立地する市区町村から、地域の実情に応じた人材ニーズが立ち上がってくる場合もあります。

Step 2 高校CNの人物像確定

学校経営や改革に関する計画に基づき高校CNの必要性が明確になると、次に「求める人物像」について検討を進めることができます。本ガイドブックで示した高校CNの職務や期待される力も参考に、優先順位も意識しながら、学校によって必要な人物像を明らかにします。

Step 3 高校CNの確保と財源

高校CNの人物像が明確になると、次にCN人材の確保を進めることになります。都道府県教育委員会、その他の部局、市区町村等が、様々なネットワークを駆使しながら高校CNの採用・配置に取り組むことになります。また、財源確保の方策も重要です。

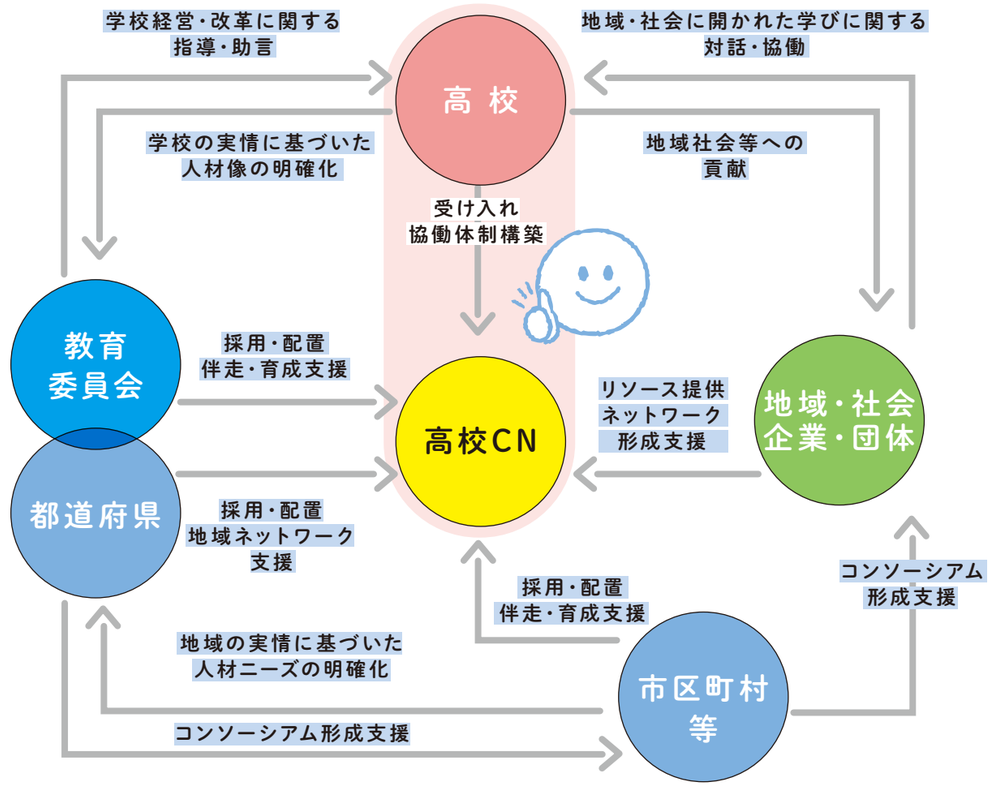
Step 4 高校CNの受け入れ

高校CNの採用・配置は、学校経営に必要な1つの手段にすぎません。高校CNを受け入れた高校では、高校CNと教職員等との協働体制構築のために様々な工夫を行っています。また、教育委員会をはじめ、周囲の関係者による伴走・育成支援や、高校CN同士のネットワーク形成支援も、高校CNの成長、活躍のために重要な観点です。

Step 5 協働体制における位置づけ

地域・社会とのネットワーク形成は、高校CNが担う大きな役割であると同時に、高校や高校CNを支える重要な体制となります。各地でコンソーシアム等と呼ばれる、高校を取りまく外部関係者のネットワークは、高校CNが学校と地域・社会を結びつける際のリソースやネットワークを提供するとともに、高校における地域・社会に開かれた学びに対話的・協働的に関わるパートナーとなります。

【高校CNを取り巻くネットワーク】



高校CN活用事例 #1

福岡県立八幡高等学校

文理分断的思考からの脱却、「科学智の統合」の理念の継承・発展を目指す高校普通科改革に必要とされた高校CN

福岡県教育庁
指導主事
菱谷 涼太良さん

八幡高校校長
神谷 輝弘さん

八幡高校研修部
部長
廣濱 一郎さん

日本の産業化をリードし、現在では「SDGs未来都市」としても先導的な取組を進める北九州市に立地する福岡県立八幡高等学校。地域の伝統校として、理数科における教育の蓄積を活かしながら、文理分断的思考から脱却し、持続可能な社会を創る担い手の輩出というビジョンを掲げた学校改革に求められたのが、学校と地域の産官学をつなぐ高校CNでした。

Step 1 学校経営の計画立案

「科学智の統合」理念の継承・発展を目指す新学科「文理共創科」の設置

文理分断的思考から脱却した人材育成の方向性

神谷さん：八幡高校では、スーパーサイエンスハイスクールの指定を受け、産官学で連携しながら次世代の科学イノベーション人材の育成に取り組んできました。蓄積された「科学智の統合」の理念や研究成果を継承・発展させることにより、文理分断的思考から脱却し、持続可能な社会をしなやかに根気強く作ろうとする人材を育成することを目指しました。

新学科の設置による伝統校の魅力化・特色化

菱谷さん：「科学智の統合」という八幡高校のビジョンは、北九州市が推進する「SDGs未来都市」に向けた動きとも連動していました。また、高校周辺地域の人口減少が見込まれる中、高校の魅力化・特色化を進めていくことは、伝統校の存続を求める地域ニーズとも合致していました。これらの動きがあわさることで、普通科教育の充実による学校の魅力向上に向け、学際領域的な新学科「文理共創科」の設置が構想されました。

Step 2 高校CNの人物像の確定

高校改革を伴走的に推進し、持続的な協働体制のかすがいになる常勤CN

廣濱さん：魅力ある教育方法、カリキュラムを開発することが求められる中で、総合的な探究の時間の企画・運営、生徒伴走や、協力連携機関との連絡調整、公開授業や校外発表会の調整といった業務が、特定の一部の教員に担われており負荷がかかっている状況でした。特に、教員が外部機関やコンソーシアムとの連携を担当すると、授業や部活動もある中で連絡のすれ違いも多く、やり取りが困難な状況に陥っていました。こうした状況を背景として、現場から高校CNが求められました。高校CNに求める人物像としては、**①新たな業務を担う教員と協働できる人、②学校と関係機関との連携・協働を持続的に推進できる人、③学校教育を理解し、活動してくれる人**が必要だという整理にいたり、**④常勤での勤務が可能な人**を求めました。

Step 3 高校CNの確保と財源

先進地視察で高校CN配置をイメージ 学校関係者に電話で人材紹介を依頼

高校のニーズ確認と先進校視察

菱谷さん：学校の改革方針や高校CNへの期待、想定する業務内容等を受けて、高校側が希望する常勤CNの採用を前提とした事業計画を作成しました。県立高校に勤務していた際に、高校CNを配置している先進地視察を行ったことがあり、高校CNがうまく機能することにより、学校の特色化・魅力化が進むことへの期待が自身の中にありました。今後の高校CN配置予算については、関係課と折衝を進めています。

面接時には、双方の疑問点を解消できる説明

神谷さん：新学科設置に向けて、教育方法やカリキュラムの開発が求められている中でしたので、高校CNには学校教育への理解を求めていました。当時の校長を中心に、学校関係者へ人材紹介を電話等で依頼して回りました。また採用時の面接では、学校教育ビジョン、職務内容、雇用形態について詳しく説明し、双方の認識のすり合わせと疑問点の解消を丁寧に行いました。

Step 4 高校CNの受け入れ

校内分掌の位置づけを明確化 高校CNの取組成果を教員へ周知

廣濱さん：着任した高校CNを**校内校務分掌の中に位置づけ、担当部署主務者を指導担当とする体制**で業務を開始しました。また、**2年生の探究活動に関わってもらうことで、分掌以外の教員との接点**も意図的に作りました。本校は年齢の近い教員をはじめ、さまざまな教員がCNに気軽に話しかけてくれる雰囲気があったため、2年生の学年団を起点に、高校CNの役目や成果を他先生に周知してもらったのが効果的でした。CNもこれにより学校全体の組織体制の把握が進んだと思います。また私自身は、**高校CNの取組や成果物を校内で積極的に周知**することを心がけ、高校CNの役割や価値についての認識共有を図っていきました。最近は新学科に関する校内教員向けのポータルサイトを作成し、**高校CN自身が視察・研修報告やコンソーシアムに関する情報発信**をしています。

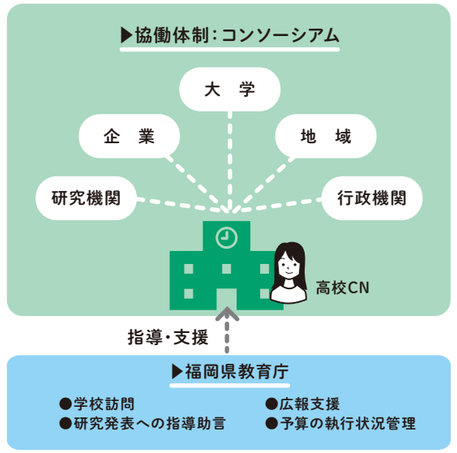
▶学内協働体制：校務分掌

【CNと協働する教員のスケジュール】
- 授業の1コマを使い、高校CN、研修部所属教員で週次の定例打ち合せを実施
- 高校CNが教員のスケジュールを確認し、空き時間に随時情報共有
- 総合的な探究の時間ある日は、授業前後に教員と高校CNで打ち合わせ

Step 5 協働体制における位置づけ

高校CNがコンソーシアム事務局を担うことで外部との連携がより密に、かつ幅広く

廣濱さん：高校CNが着任する以前は教員が地域の関係機関が参加するコンソーシアムの運営を担っていましたが、運営業務が中心で、コンソーシアムの拡充、改善の実施には至っていませんでした。また連携のあり方も、学内にお招きして授業を「観察」してもらうことがメインでした。現在では高校CNがコンソーシアムの運営を担ってくれることで、新たなメンバーをお迎えできていると共に、外部の方との「協働」が深化できていると感じます。関係機関によるコンソーシアムと高校が、改革を推進する両輪として機能しており、高校CNはそれをうまく仲介しています。



高校CN配置の成果

- 外部連携等、探究活動において生徒の活動する場所や人が外に広がっています。また、生徒の班活動への伴走により、生徒の活動充実にもつながっていると感じます。（教員）
- 中学生に対するオープンキャンパスの場でも、本校には高校CNがいることをアピールしています。保護者の方にも関心を持ってもらえていると感じます。（教員）
- 先生とは違う立ち位置から、探究活動に伴走してくれるのが斬新です。（生徒）
- コンソーシアムでの議論の内容に対して、即時的に学校からのフィードバックが返ってくるようになるなど、情報、意思の疎通がやりやすく、物事が進みやすくなっています。そのことが自身のやりがい、モチベーションにもつながっています。（コンソーシアム関係者）
- データの整理の仕方ひとつであってもとても分かりやすく、そういった小さなことでも非常に助かっています。特にICTスキルの高さに助けられています。（教員）
- 教員がどうしても日々の業務に追われて省力化されてしまうことについても、生徒のためを思って提案してくれることに助かっています。また、実質的な業務の削減から生まれる教員の余力により、授業づくりや生徒に向き合う時間が充実しています。（教員）
- 八幡高校の事例を知る他校から、高校CN配置について相談を受けるようになりました。（教育庁職員）

北海道大樹高等学校

高校、そして町の未来を共に考え挑戦するパートナーとして必要とされた高校CN

大樹町唯一の高校として、地域からの存続や魅力向上に対する大きな期待が寄せられている北海道大樹高校。町の豊かな地域資源をフィールドとした学びの蓄積や地域連携の土壌を活かし、さらなる探究的な学びの充実に向けた体制構築を行うためのキーパーソンとなったのが高校CNでした。

北海道教育委員会
主査
河村 真一郎さん

大樹高校校長
福本 正規さん

大樹高校
地域探究委員会
リーダー
別段 健太さん

Step 0 高校CN人材との出会い

福本さん：神宮司さんは以前より大樹小学校、大樹中学校でも地域コーディネーターとして活躍されており、小中高で1つ設置されている学校運営協議会を通して、高校関係者とも面識がありました。令和2年頃に高校で探究的な学びに取り組み始めた際にも、カリキュラム作りなどでアドバイスをいただいていました。

Step 1 学校経営の計画立案

町に唯一の高校の存続のための魅力向上・体制構築

地域社会学科のロールモデル

河村さん：大樹高校は、「大樹学PLUS」において、地元で夢を叶えるというテーマのもと、地域コーディネーターの活動により農業、観光、航空宇宙産業等の人材が本校の探究学習に参画していること、コミュニティ・スクールを導入するなどの地域との連携・協働体制の構築が進んでいることから、「地域社会に関する学科」のロールモデルとして最適であると考えました。そこで、文部科学省「普通科改革支援事業」等も活用しながら、高校のさらなる魅力向上を目指しました。

高校存続への町からの大きな期待

福本さん：大樹町としても大樹高校存続へのニーズは大きく、平成24年頃から町長をトップとする「大樹高校活性化推進協議会」において議論を続けています。昨今は一層注目度が高まり、令和4年度には大樹町議会の中に「大樹高校の活性化のための特別委員会」が発足しています。

Step 2 高校CNの人物像の確定

新たな繋がりや視点をもたらしてくれる兼業CNに期待

学校と地域資源、地域人材をつなげるネットワークを有する人材

福本さん：探究的な学びを進める中で、必ずしも学校外にネットワークを持つわけではない教員にとっては、「地域にはどんな人材がいるのだろう？」「こんな探究をしたいのだが、どんな人に話を聞けばよいのだろう？」といった困り感がありました。そこで、地域資源や地域人材とつなげてくれるネットワークを有していると共に、探究的な学びの充実に向けて教員と共に試行錯誤してくれるような高校CNがいてくれるとよいと感じていました。

教員とは異なる視点や足場を持つ兼業CNへの期待

別段さん：新学科の学びの実現には、「教員ではない多様な大人との関わり」や「教員とは違う視点・考え方との出会い」が必要だと考えていました。神宮司さんは前職含め多様な経験をされており、現在も自身の会社経営をはじめ地域の中で様々な事業を展開されています。兼業CNであることの強みを生かし、学校へ新たなつながりや視点をもたらしてくれるという期待がありました。

Step 3 高校ＣＮの確保と財源

小中学校のコーディネーターから高校コーディネーターへ 学校外の活動も重視した勤務形態を採用

小中学校でのCN経験を活かして高校CNへ

福本さん：以前より大樹小学校、大樹中学校で地域コーディネーターとして活躍されており、元々つながりのあった神宮司さんに、高校にもより深く関わっていただきたいと考え相談しました。令和4年度に文部科学省の普通科改革支援事業へ申請するタイミングで、大樹高校の高校CNとして就任いただきました。

学校外での自律的な活動を保証する勤務形態を検討

福本さん：高校CNの業務は学校の中だけに閉じるものではありません。学校外での様々な調整や情報収集も大事な業務ですので、リモートワークもOKという条件で就任依頼をしました。「探究的な学びを充実させる」「生徒募集につなげる」という目的のもとに行う学校外での活動については、高校CNとしての勤務時間に含めてもらっています。実質的には、ご自身の企業経営を通して得た知見や、地域で子育てをする保護者として持つネットワークなども、高校CNとしての業務に生かしてくださっています。

Step 4 高校CNの受け入れ

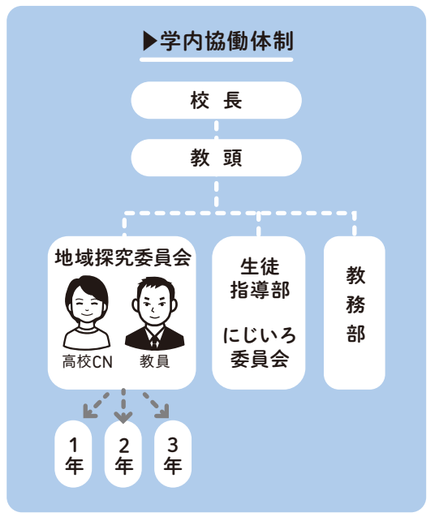
コアとなる校務分掌への高校CNの参画 議論の内容を学内外に周知

探究的な学びの企画・運営を担う分掌に参加

別段さん：高校CNには探究的な学びの企画・運営を中心的に担う校務分掌（地域探究委員会）に参画してもらっています。地域探究委員会と該当学年が、授業等の実施前・実施後に打ち合わせを繰り返しながら教育活動を進めています。

高校と町との情報共有の場にも参加

福本さん：地域探究委員会での議論を、他の教員や町教育委員会に共有することを意識しています。地域探究委員会で話し合ったことを簡単な資料に落として学内でこまめに回覧しているほか、定期的に町教育長に面会し、学校だよりを渡したり、状況共有をしたりしてきました。現在は、大樹高校活性化推進協議会のもとにワーキンググループが発足したことで、町と定期的に情報共有ができるようになりました。高校CNもそのメンバーとして参加し、高校と町をつなぐ役割を果たしてもらっています。



【受け入れの工夫】

①総合的な探究の時間前後の密な打合せ

②地域内でのネットワーキングを保証する勤務形態
学校外活動を勤務として位置づける柔軟な運用

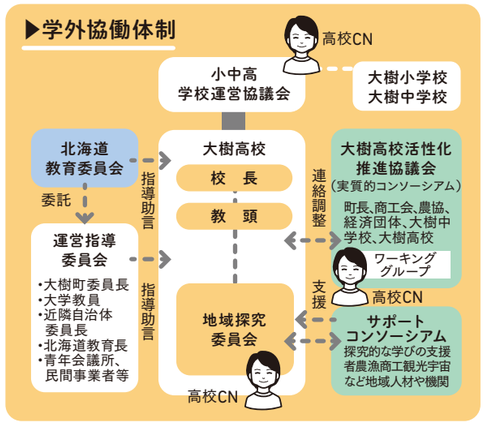
③高校と町の定期的な情報共有
大樹高校活性化推進協議会のもとに
ワーキンググループに高校CNが参加

Step 5 協働体制における位置づけ

高校、町が一体となった推進体制の整備 高校ＣＮの協議会への参画

福本さん：大樹高校の実質的なコンソーシアムは、大樹高校活性化推進協議会が担っています。協議会には、町長、商工会会長・青年部代表、農協会長・青年部代表、経済団体会長、中高の管理職など、地域のさまざまな関係団体が参加しています。高校CNはこのコンソーシアムに参加しているほか、小中高で一体的に設置されている学校運営協議会の委員でもありますので、町の関係者との連携や、学校種間の情報共有、連携がスムーズに運ぶ要因になっています。

別段さん：探究的な学びに関わってくれる多種多様な地域人材・機関を「サポートコンソーシアム」として組織化しており、高校ＣＮは構成員拡大のための活動も担ってくれています。組織化したことにより、迅速かつ円滑な学びの支援体制を構築することができました。



高校ＣＮ配置の成果

思考のプロセスや着眼点が教員と異なることも魅力です。教員は積み上げ型で考える傾向がありますが、高校CNはゴールへの辿り着き方を教えてくれるように思います。（教員）

教員だけではつながることのできない、多様な地域人材が参画してくれています。生徒の、異なる価値観を持った他者との協働意識や、共に社会を形成する意識が高まったように感じます。（教員）

挑戦しようと思えば実現できる高校だと思った。（生徒）

高校CNにはこれまで手薄だった広報活動も担ってもらっていますが、その効果も出ていると感じています。（校長）

高校CNには地域探究サークル（課外活動）の指導も担ってくれていますが、そこでの子どもたちの成長が著しいです。人前に出ることが苦手だった生徒のプレゼン力が向上したり、はじめは消極的だった生徒が活動場所を求めて他校の生徒と一緒に新たなプロジェクトを始めたりしています。（校長）

地域の方からも、「これまでは学校に関わりたくとも関わり方が分からなかったが、高校CNがいることで声掛けしやすくなった」という声をいただいています。実際に、高校生ボランティアの募集など、地域からの働きかけも増えています。（校長）

Step 1. 学校経営の計画立案

高校CNを採用・配置する際、配置される学校で何を担ってもらいたいのか、どのような力を発揮して、学校のどのような課題に取り組んでもらいたいのかがある程度はっきりしていなければ、その力を十分に発揮することは難しいものです。それらを考える出発点になるのが、高校が目指すべき姿であり、地域・社会にとって果たすべき役割であるスクール・ミッションです。

【チェックリスト】

1 スクール・ミッションと生徒の実態

- ☐ 設置者が設定した、各校が地域や社会に果たすべき役割を定めたスクール・ミッションはどのようなものですか？
- ☐ 現在の生徒の実態やニーズはどのようなものですか？

ヒント！
- 各種調査等によるデータの収集、検討
- 生徒へのニーズ調査、生徒との対話

2 教育目標やスクール・ポリシー

- ☐ ①を踏まえ、策定されているスクール・ポリシーはどのようなものですか？
- ☐ 進行中または進行予定のプロジェクトで達成したい目標はどのようなものですか？

3 高校を取り巻く地域・社会の期待や解決したい課題

- ☐ 地域・社会が学校に寄せている期待や、解決したい課題は何ですか？
- ☐ 高校と地域・社会をつなぐコーディネート機能への期待は、どのようなものでしょうか？

ヒント！
- 立地市区町村の行政計画等における高校の位置づけ
- 学校運営協議会、コンソーシアム等からの意見

4 実現したいカリキュラム

- ☐ スクール・ポリシーを実現するために、どのような特色を持った教育課程を編成していますか？　あるいは新たに編成しようとしていますか？
- ☐ 教育課程において、地域・社会と協働して行いたいプロジェクトや授業の工夫はどのようなものですか？

5 目標達成のため、現状で解決すべき課題の整理

- ☐ 理想・目標に近づくために、学校内にどのような課題がありますか？
- ☐ 必要なカリキュラムの実現のために、学校内にどのような課題がありますか？

ヒント！
- 課題について考える視点の例（目標共有／教科内容、カリキュラム・マネジメント／役割分担／教職員の働き方／コンソーシアムとの関係性／プロセス設計／ツールの検討・浸透など）

Step 2. 高校コーディネーターの人物像の確定

目標達成に向けた課題を解決するために、新たにどのような職務や機能が加わると良いでしょうか。ここで整理された内容が、高校CNに求められる役割、機能、職務に直結します。高校CNの標準的職務要件も参考に、優先的に必要な機能を整理しましょう。内容を検討した結果、現状の課題解決を現状の教職員体制で対応可能な場合は、高校CNの配置以外の解決方法も検討してみましょう。

【チェックリスト】

6 課題解決のために、必要な職務、コーディネート機能

- ☐ 前頁のチェックリスト⑤で整理した課題を解決するために、必要な職務、中でもコーディネート機能は何ですか？

ヒント！
- 高校CNの標準的職務（P28~29）を参考に優先的に必要な職務を列挙

7 課題解決のために、学校や教職員に必要とされる変化

- ☐ 高校CN配置の有無にかかわらず、課題解決のために学校や教職員に求められる変化は何ですか？

ヒント！
- 教員の働き方改革の視点（〇〇業務を減らし、教員が〇〇に集中できるようにする等）
- 社会に開かれた教育課程実現の視点から、必要なスキルやマインドの変化

8 高校CNに求めたい職務や力

- ☐ ⑥、⑦を踏まえ、高校CNに求めたい職務はどのようなものですか？
- ☐ 上記の職務を遂行するために、高校CNに求めたい力はどのようなものですか？

ヒント！
- P30～の高校CNに期待される力を参考に
- すべての内容を並べるのではなく、優先順位をつけて記載

COLUMN

人物像の確定のヒント！

高校CNへの期待や、担ってもらいたい職務の内容や水準が高まるあまり、あらゆる力を兼ね備えた「スーパー高校CN」のような人物像ができあがってはいませんか？　学校の方針を描くのはもちろん重要ですが、高校とCNとのマッチングは「人ありき」であるのもまた事実。柔軟な発想で、高校CNと協働する姿を描いていきましょう。

「高校CNは人づてのネットワークで探すことも多いので、往々にして、当初設定した人材像すべてに合致しない場合もあります。受け入れ側の優先順位付けももちろん重要ですが、今いる候補者の持つ強みから、どのような展開が可能か考える、逆向きの発想も重要だと感じます」（教育委員会職員）

「それぞれ異なる業務経歴や強みを持った複数人の高校CNに入ってもらうことで、業務を分担したり補いながら、連携して業務にあたってもらっています」（教員）

Step 3. 高校コーディネーターの確保と財源

高校CNの雇用主体は、都道府県教育委員会や学校法人など、設置主体が雇用する形のほかに、都道府県首長部局や市区町村など、高校CN配置による価値を期待する・受け取る主体が財源を用意するパターンも存在します。学校と社会・地域を越境する存在としての高校CNの価値や可能性を明確化し、関係者間で広く共有しながら、幅広い視点でCNの雇用方法を検討していくことが求められます。

財源確保の手段例	高校設置主体（教育委員会等）による予算化・配置	●教育委員会等が推進する高校改革事業や魅力化事業、特色ある教育活動の実施、カリキュラム開発等に学校が取り組む事業において、その推進を教員と共に担う高校CNを位置づけることが考えられます。 ●文部科学省等が募集・採択する高校改革事業等において、高校CNの配置を位置づけることも考えられます。
	地域活性化を担う首長部局や、高校が立地する地方自治体による予算化・配置	●高校の魅力化は、高校が立地する地域への人材の還流や、活性化を導く可能性を持っており、地域活性化の手段としての一面を有しています。また、高校CNによる高校生と地域社会のつながりづくりは、地域課題の共創的な解決を推進する意義もあることから、地域活性化を担う首長部局や高校が立地する地方自治体と協働し、高校CNの配置を進めていくことが考えられます。
	民間資金を活用した予算化・配置	●高校に対する直接的な助成を行う財団等の民間資金も活用できる可能性があります。各学校の独自施策を推進する存在として、高校CNを位置づけていく方向性が考えられます。
	国による人材派遣制度等の活用	●現在活躍している高校CNの中には、地域おこし協力隊制度によって地方公共団体から委嘱を受け、高校を拠点として活動している者もいます。地域おこし協力隊員の活動費用は国から自治体へ地方交付税措置されます。他にも、地域活性化や専門家派遣等の人材派遣制度の枠組みを活用して、高校CNの配置を進めていく方向性が考えられます。
契約方法の例	個人への雇用・委嘱・委託	●常勤として雇用するか、他の組織にも所属している強みを活かし、委嘱や委託を行うかなど、目的に応じた検討が求められます。
	企業・団体への委託	●学校と地域・社会をつなぐコーディネート機能を強みとする団体と契約し、複数人の高校CNを複数校に派遣したり、高校CNがチーム制で1つの高校に関わるなど、多様な配置方法を行う例が増えてきています。高校CN間の情報共有や連携が促進されるなどのメリットも期待されます。
配置方法の例	専属配置	●1校に所属し、職務を遂行します。
	複数配置	●複数校に対して職務を遂行します。教育委員会等を拠点として、複数人が複数校を対象にチームで職務を遂行する例もあります。

【チェックリスト】

9 財源確保

- ☐ 財源確保にあたり協議、調整が必要な関係者は把握できましたか？
- ☐ 財源確保にあたり必要な説明資料や根拠資料は揃っていますか？
- ☐ 高校CNを配置する校数や、配置人数等の考え方や規模は整理できましたか？

ヒント！
- 他自治体、他校における高校CNの活躍、配置による成果の把握
- 首長部局と市区町村の連携

10 契約条件の整理

- ☐ 個人の雇用、委託・委嘱ですか、または企業・団体への委託を想定しますか？
- ☐ 勤務形態は、常勤ですか、非常勤ですか？　現職との兼務を認めますか？
- ☐ 求める職務レベルと報酬や雇用条件は妥当ですか？

ヒント！
- 他自治体、他校における高校CNの求人、雇用条件の事例収集
- 他の学校教育関係専門職の求人、雇用条件の把握

11 募集、採用活動の計画

- ☐ 募集方法は複数のルートを検討されていますか？

ヒント！
- 人材紹介ルートの検討
- 関係者のネットワークを介した紹介
- SNSを活用した情報発信
- 高校CNによるネットワーク内での紹介、情報発信

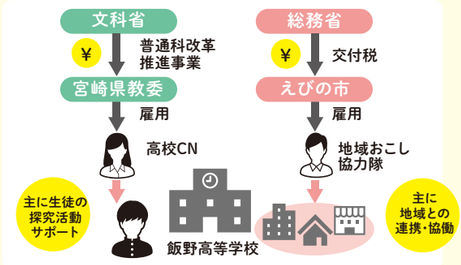
事例 #1 ▶ 宮崎県立飯野高等学校

県教委雇用と市雇用の高校コーディネーター2人体制

▲武井恒介さん　▲竹本佳代さん

宮崎県立飯野高等学校は、宮崎県えびの市に唯一立地する公立高校であり、普通科（総合コース・探究コース）と生活文化科からなる全校生徒230名の高校です。同校には、高校CNが2名配置されており活躍していますが、それぞれの雇用主・財源は異なります。竹本佳代さんは、同校OBで県内企業勤務や市内カフェ店員等を経験している人材であり、普通改革事業の予算を活かし、高校が雇用。雇用主との関係から、高校内での探究活動のサポート（生徒同士のコミュニケーションやメンタル面のサポート等）が中心となり、主に学校内が活動場所となっています。武井恒介さんは、えびの市に地域おこし協力隊として雇用され、高校CNの役割を職務としています。地域おこし協力隊はその制度の性質から、地域住民との距離が近く、高校と地域の接続・関係構築の役割を担いやすい特徴があるほか、市と高校をつなぐ役割も担っています。活動場所も学内に限らず、地域全般と広く、さらに市の職員であるため、高校内での探究活動支援（生徒のプロジェクト伴走、カリキュラム作成サポート等）だけではなく、中高連携の強化を目的に市内中学校でも同様の支援を行っています。

地域おこし協力隊の雇用に係る費用については、国から市町村に対して特別交付税措置がされるため、市町村としては自主財源の負担が極めて小さく活用しやすい制度といわれています。また、予算措置の対象は雇用する人材の人件費（給与）だけでなく、地域おこし活動に係る経費（事業費）も含まれ、高校CNが各種活動を展開しやすい点に特徴があります。



事例 #2 ▶ 広島市教育委員会 市立美鈴が丘高等学校

臨時的任用教員の枠で高校コーディネーターを雇用

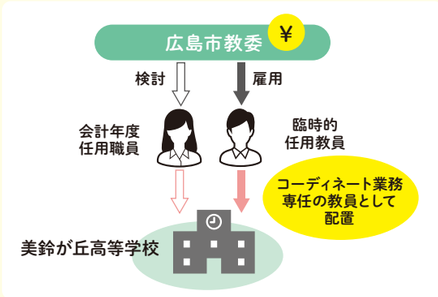
▶楠香谷隆規さん

広島市立美鈴が丘高等学校は、全校生徒720名の公立高校であり、令和7年度より普通科がグローカル探究科に改編されます。同校には広島市の臨時的任用教員として、令和6年より楠香谷隆規さんが高校CNとして常勤で配置されました。

楠香谷さんは、食品製造業、特別支援学校実習教員の経験を有しており、ものづくりマイスターの資格を取得しています。製造・ものづくりにおける専門性を活かして、市内企業との連携を中心的な役割としながら、探究的な学びやカリキュラム策定のサポートを行っています。教員でありながら授業は担当せず、コーディネート活動に専念しやすい体制を作っています。

高校CNを「教員として」雇用することの利点として、校務分掌である教育研究部の部会や職員会議、職員研修に柔軟に参加しやすい点が挙げられ、学校の状況理解や他の教員との連携を行いやすいこともメリットです。

広島市では、継続的な高校CN雇用の観点から、時限的な事業予算内による配置ではなく、臨時的任用教員による継続した高校CNの配置に加えて、会計年度任用職員等によって複数人のCNを同校に配置すること等を検討しています。



Step 4. 高校コーディネーターの受け入れ

高校CNにとって、学校という「異文化」に足を踏み入れることは、期待と同時に不安も大きいものです。単に「学校に馴染ませる・適応させる」という観点だけではなく、「学校外で培った力や文化を発揮してもらう」ためにどうしたらよいか。つまり、高校CNを、学校に新たな風をもたらす存在として捉え、受け入れる必要があります。そのためにも高校CNと教職員とがチームを形成する必要があります。

【チェックリスト】

⑫ 目的・目標の共有

- ☐ 高校CNに、スクール・ミッションやスクール・ポリシーなどを伝えられていますか？
- ☐ 高校CNとして果たして欲しいミッションを伝えられていますか？
- ☐ 教職員に高校CNのミッションを共有できていますか？

⑬ 役割の設定、共有

- ☐ 高校CNの職務や役割は明確化されていますか？
- ☐ 高校CNを必要な校務分掌に配置し、関わる会議や授業などを明確にしていますか？
- ☐ 高校CNの持っている力や経験、強みを教職員と共有する機会を作れていますか？
- ☐ 高校CNの職務や役割分担について、調整する機会が用意されていますか？

⑭ 人間関係の構築

- ☐ 高校CNと教職員をつなぐ役割を担う教職員はいますか？
- ☐ 高校CNに学校文化を伝える機会を設けていますか？
- ☐ 高校CNがわからないことをいつでも質問できる機会が用意されていますか？
- ☐ 高校CNとの接点が少ない教職員との関係構築の方法を検討できていますか？

⑮ 情報共有方法の構築

- ☐ 高校CNと教職員やコンソーシアム等の構成員との情報共有手段は整備されていますか？
- ☐ 高校CNと学校の運営や生徒に関する情報をどこまで共有するか決められていますか？

ヒント！
- 定例打ち合わせの持ち方
- 情報共有ツール（メール、チャットツール、共有フォルダ等）

⑯ 執務環境の整備

- ☐ 高校CNが執務を行う座席はどこに配置するか考えられていますか？
- ☐ 高校CNの業務に応じて必要なツールや機器は用意されていますか？
- ☐ 高校CNが地域・社会に足を運びやすい仕組みは検討されていますか？

ヒント！
- 外出、出張のしやすさ
- 生徒との接点の持ち方

⑰ コミュニティ接続、育成体制

- ☐ 高校CNの成長支援に責任を有する役職は設定されていますか？
- ☐ 高校CNの校内での研修体制は計画されていますか？
- ☐ 高校CNに必要な力を高める外部の研修への参加は計画されていますか？
- ☐ 他校の高校CN同士のつながりやコミュニティへの接続支援はできていますか？

事例 #1 ▶ 愛媛県立三崎高等学校

過去の資料や地域人材の名刺などの丁寧な引き継ぎ

愛媛県立三崎高等学校は、四国の最西端に位置する日本一細長い半島、佐田岬半島にある伊方町に立地しており、令和4年度より普通科改革支援事業に取り組み、令和6年度入学生から普通科を社会共創科へと再編しました。また、県外生の受け入れを積極的に行っており、生徒の3割が県外留学生で構成されています。

同校に常勤で雇用されている石本冴さんは、高校講師、モンゴルでの青年海外協力隊、ミャンマーでの勤務を経て令和４年度に入職しました。地域とのコーディネートや総合的な探究の時間、新学科設立に向けたサポートなどを行っています。

石本さんの入職時には、過去の資料や地域人材の名刺の提供など、教員からの丁寧な引き継ぎを受け、地域の方々との挨拶の機会を持つことができました。これにより、三崎高校や伊方町の状況、自身の立場についての理解を深め、業務にあたることができたといいます。また、入職時から職員室に石本さんのデスクが配置されているため、教員や生徒に対して近い距離で接することができ、高校への理解や生徒とつながることがスムーズに進みました。

石本さんは、入職時にあればより良かったと感じた点として、学校内のルールに関するマニュアルやフォーマットの提供を挙げています。また、仕事は遠慮なく依頼してもらい、〆切や報告を設定してもらえると、日々の達成感を感じやすくなると言います。石本さん自身の工夫としては、バックグラウンドの異なる教員とコミュニケーションを通じて認識のずれを修正することや、高校CNの業務を過度に線引きしないことによって、機動的に活動しやすい環境を作っているそうです。

事例 #2 ▶ 京都市立開建高等学校

高校CNを「コーディネート」する管理職の存在

京都市立開建高等学校は、京都市立塔南高等学校を移転・再編し、令和５年度に新学科ルミノベーション科を設置する形で開校しました。「『やってみたい』をやってみる」を合言葉に、学校×実社会を学びのフィールドとした多彩なカリキュラムの展開が特徴で、例えば、学校設定科目「ルミノベーションⅠ」では生徒が地域企業などで働く大人に社会や仕事についての生き方や考え方をインタビューし、自らのキャリアを深く考える「未来デザインプログラム」という授業が行われています。こうした授業を効果的に行うためには、訪問先となる地域企業等の発掘や、生徒訪問時のプログラム開発が必要となりますが、その企画・運営や外部との連絡調整を担う存在として柏山久美子さんが高校CNとして着任しました。

柏山さんはキャリアコンサルタントの資格を持ち、大学のキャリアセンターでの勤務経験を活かすべく着任しましたが、着任時には高校の事情が全くわからず、高校CNとしてどのように働けばよいのか手探りであったといいます。

振り返ってみると、次第に心地よく活躍できるようになっていった要因として高校CNをコーディネートする管理職の存在がありました。教頭の宮越敬記さんは前任の市教育委員会時から設立計画に携わってきており、同校が目指す教育コンセプト作成の中心メンバーでした。宮越さんは柏山さんの着任時から「高校CNの役割とは何か」を柏山さんとイメージ共有するとともに、高校CNとして生徒の探究活動の伴走ができるよう、高校CNと現場教員の橋渡しを常に心がけています。柏山さんが「（宮越教頭は）民間から来た高校CNの言語と教員の言語を翻訳してくれる存在」と語るように、俯瞰した立場で、高校CNと現場教員が協働できる環境づくりを担っています。また、高校CNが自ら学校の全体像や実態を理解できるよう学校運営協議会の運営事務にも携わってもらうといった細やかな配慮もされています。

さらに同校には、市立高校と社会・産業界・大学をつなぐ「高等学校コンソーシアム京都」の事務所が置かれており、そこでは学校長経験を有する元教員が勤務しています。高校の組織や仕組みが良くわからなかった頃に「駆け込み寺」として相談できる有難い存在だったと柏山さんは振り返ります。着任時の高校CNにとって、高校のことを熟知した管理職（経験者）に相談できる環境は活躍に向けた大切な基盤なのかもしれません。

Step 4. 高校コーディネーターの活躍と校長、教育委員会の役割

高校の特色化・魅力化の実現を目指す高校改革において、学校経営の責任者である校長と設置者である教育委員会のあり方が、より一層重要になってきています。高校CNを取り巻く協働体制を機能させるために、両者に求められる姿の一例を紹介します。

学校経営の要としての校長

高校CNはその役割や立場が極めて多様です。言い換えると、各高校におけるCNのあり方は、各高校で、その人材毎に明確にしていくことが求められます。この明確化の作業・判断を担うのは校長の仕事であると言えます。校長は、自校のビジョンやスクール・ポリシーに照らして必要になる取組、不足している取組を明確にし、高校CNを配置することでこれらの取組を実現していく学校経営のあり方を構築することが求められます。

教育を支えるCN、経営を支えるCN

従来から学校の中核的な業務とされてきている「教育」の範囲だけでなく、生徒募集や教育活動に必要な資金・協働先の確保といった「経営」の範囲まで、校長が担う職務が広がってきています。高校CNの2つの職務、総合的な探究の時間等の地域や社会の資源と学校をつなぐ「教育・探究コーディネート」と協働体制の構築運営を担う「経営・協働コーディネート」は、それぞれ校長が担う上述の2つの職務に対応しています。

学校運営協議会やコンソーシアムなど、地域・社会との協働体制の上に、学校経営が行われはじめた現在、いかに外部人材や関係構築の力を引き出し、共に学校を支え、学びを作っていくかが問われています。こうした文脈の中で、高校CNをどのように活用するかは、校長の差配次第といえるでしょう。

伴走者としての教育委員会

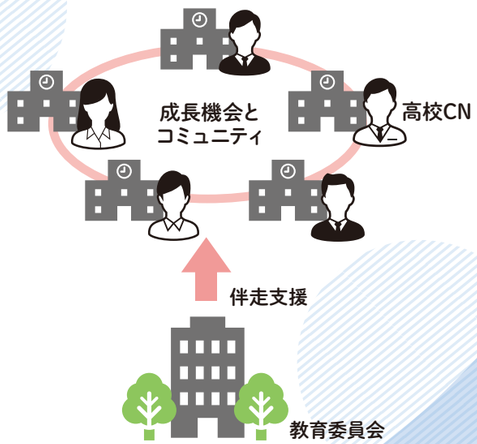
一方で、設置者である教育委員会もまた、社会に開かれた教育課程を推進する重要な立場を担っています。教育委員会へのアンケートによると「高校CNに求めるもの」として、「学校に、外部からの文化や知見をもたらすこと」と考える教育委員会も少なくないようです。教育委員会はこうした観点から、高校CNが「外部」から学校という「内部」に入る際に適切なサポートを行うと共に、こうした「外部」にも足場を持つ高校CNの重要性を学校現場に伝えていくことが求められるでしょう。いわば、「社会に開かれた教育課程」を実践するための伴走者としての役割が求められています。

「成長機会」と「コミュニティ」の提供

雇用形態も、校内でおかれた状況もさまざまな高校CNが、孤立することなく成長し、活躍するためには、教育委員会が持つ広域のネットワークが強みとなります。複数の高校CNや指導主事等との連携促進を通して、高校CNの人材育成機能の一翼を担うことが重要と考えられます。

教育委員会に対して行ったアンケートによると、高校CN（専任・常勤のCNを想定）に必要だと考えられる研修機会について、「CNに対する研修を実施」に次いで、「教員に対する研修に参加」、「外部研修への参加を支援」という回答がありました。このように高校CNには多様な研修を越境的に渡り歩いていく姿が求められているとも言えます。こうした越境を可能とする支援や仕組みづくりも必要と考えられます。

高校CN同士のネットワーク



事例 #1 ▶ 島根県立吉賀高等学校・津和野高等学校・浜田高等学校

高校コーディネーターの役割の明確化、その差配は校長の仕事

現在、浜田市教育委員会に在籍する熊谷修山さんは、これまでに島根県立吉賀高校、津和野高校、浜田高校の３校で校長を歴任してきました。島根県が高校魅力化を推進する中でCN配置が県内に広がっていった時期に校長を務めた熊谷さんは当時を振り返り、CNを活かした学校経営における校長のあり方として３つ重要な点をあげています。

まず１点目は、学校のミッションに照らして、学校の「必要・不足」を「経営・教学（教育活動）」双方の視点で明確化すること。この点が明確になれば、どのような強みを持つ高校CNを採用すべきかが明らかになるといいます。

２点目は、高校CNが注力する仕事・役割を明確化すること。「経営（協働体制構築や生徒募集、資金調達等）」と「教学（総合的な探究の時間の設計・支援等）」のどちらに比重を置くのかといった方針を決めることが重要です。熊谷さんは「この差配は校長の仕事。丸投げは厳禁」と自身の経験を踏まえて断言します。

３点目は、配置・所属を明確にすること。特に市町村が採用した高校CNが高校に出向いて仕事をするようなケースでは、高校内の配置・所属を明確にしなければ高校CNは居場所がなく、期待役割を発揮できないといいます。熊谷さんは、「職員室に席を設ける」「高校CNにも校務分掌を与える」「職員会議に出席させる」といった配置・所属を明確にしてきました。

熊谷さん曰く、「高校CNとは、学校（校長）と学校のミッションを共有し、学校・生徒と地域・社会を結ぶ中間支援者として、学校の教育活動（教学）と学校の経営（経営）を支援することで、学校と地域の発展に貢献する存在である」と総括しています。

熊谷 修山さん
島根県立高校で校長を歴任し、現在は浜田市教育委員会に在籍し、HAMADA教育魅力化コンソーシアム魅力化コーディネーター。一般財団法人亀山教育振興会事務局長

事例 #2 ▶ 愛媛県教育委員会・島根県教育委員会

県域で提供する「学び」と「つながり」の場

愛媛県教育委員会事務局社会教育課では、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指す学校と、「地元に定着する人材の育成」を求める地域の橋渡し役・つなぎ役として、市町が地域おこし協力隊制度を活用して「地域教育プロデューサー」と呼ばれる人材を配置し、「学校を核とした地域づくり」「教育の魅力化による地方創生」「地元に残る人材の育成」を推進する取組を県が支援しています。県は市町が配置する人材を申請に基づきリストに登録し、リーフレットを作成したり、県HPに配置状況を掲載したりして、周知に努めているほか、地域教育プロデューサー同士の情報交換の場や事例発表の場、ステップアップ研修会の場を設けて、活動の拡充や連携・ネットワーク形成を図っています。

同様に島根県教育委員会も、高校CNに向けた研修を実施しています。CNの業務には正解がないがゆえに、壁にぶつかった際に見聞を広げられる機会が柔軟に設定されています。また、高校CNは地域外から移住してくる人も多く、周りに頼れる人が少ない中での活動には迷いやストレスも伴うと予想されます。そのため、気軽に相談できるような場を作ることが有効であろうと考え、日ごろから定期的に交流を持つ機会を作り、多様な機関が様々な研修・交流の場を用意しています。例えば、地域教育推進室で「高校魅力化コーディネート人材研修」「コーディネーターゼミ」、社会教育センターでは「コーディネーター研修」「地域魅力化プログラム」等が実施されているほか、島根大学教育学部でも関連研修・講座が開催されています。

▲島根県での研修の様子

Step 5. 協働体制における位置づけ

高校と地域・社会がビジョンを共有し、両者の持続的な好循環を生み出すためには、コンソーシアムと呼ばれている、意思決定と活動を一体的に行うネットワークを設置することが有効です。こうした協働体制の立ち上げから運営に至るまで、高校CNが価値を発揮できる部分はとても大きく、また継続的な議論と参加者の主体性の醸成は、高校CNによるコーディネート機能に相乗効果をもたらします。

【チェックリスト】

⑱ コンソーシアムの立ち上げ、運営

- ☐ 社会に開かれた教育課程の実現のため、関係者が議論するネットワークは用意されていますか？
- ☐ コンソーシアムでは、何を主な議題（狙い）とするか明確になっていますか？
- ☐ コンソーシアムの運営に、高校CNはどのように関わるか、定められていますか？

⑲ 教育活動への参加

- ☐ コンソーシアムの関係者等に対して、どのような教育活動へ参加してもらうか確認はできていますか？
- ☐ コンソーシアムと高校CNが両立することで、どのような教育活動を実現したいか整理できていますか？

⑳ 地域・社会への効果

- ☐ コンソーシアムがあることによる地域・社会側の利点を検討できていますか？
- ☐ 高校による地域・社会への貢献や持続可能性の向上に、高校CNはどのように関わるのか共有できていますか？

事例 #1 ▶ 長野県野沢北高等学校

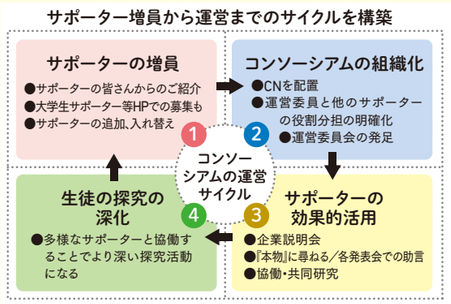
佐久エリアコンソーシアムの構築による探究の深化

長野県野沢北高等学校は、平成27年度より職員の発意で「探究」導入へ舵を切り、平成29年度より「探究基礎」「探究」の授業を開始しました。こうした取組が3年目を終えた令和2年度、生徒の探究活動が今後一層多岐にわたるとの予測のもと、外部からの専門的な助言と援助を継続的に得られる体制づくりを求めていた高校と、「新たな学び」を創出してほしいという地域ニーズが合致し、「佐久エリアコンソーシアム」の構築に着手しました。

当時探究係主任であった伴野健一さんが主導し、地域のコアメンバーと共に、活動計画などを検討していきました。多岐にわたる生徒の探究を支援するサポーターは「ネットワーク型」をとり、生徒の学びに合致した人材をメンバーが紹介しあうこと、生徒の関心に応じて柔軟に関与の程度を変える「緩やかなつながり」を重視することなどを方針としています。

令和5年度からは、退職された伴野さんが学校と地域を繋ぐ「地域連携コーディネーター」としてコンソーシアムの運営に関わる体制が構築され、高校の探究係と連携して、サポーターと教員、サポーターと生徒が、互いに負担感少なく自律的に連携できるための仕組みづくりなどを進めています。具体的には、サポーターのプロフィール一覧の生徒への提供、生徒の探究テーマ一覧のサポーターへの周知、外部との連携マニュアル整備などを進めています。

コンソーシアムのコアメンバーは学校運営協議会にも参画することで、学校経営と探究的な学びの推進を相互に連携させています。また将来的には、佐久エリアの小・中・高校が関わる一体的なコンソーシアム経営を構想しています。



COLUMN

VUCA社会における協働のしくみ・学びのしくみとその運営

佐藤真久 さとうまさひさ

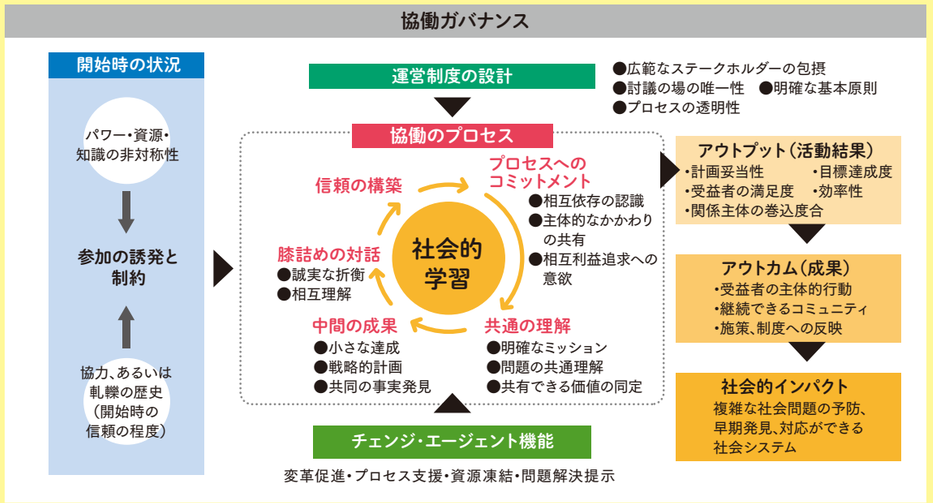
東京都市大学大学院・環境情報学研究科・研究教授。UNESCOが主導機関として実施された「国連・ESDの10年」（2005-2014）とその後継プログラムに深く関わる。複雑性の高い社会において、学習と協働の連動性を主張している。地域づくり、協働ガバナンス、社会的学習、探究活動に関する書籍多数。

今日の社会状況は、変動性が高く、複雑性に富み、不確実性・曖昧性が高い社会（VUCA社会）であると言われています。これまでの社会問題の解決にむけた取組は、要因を分解し、問題を除去するという個別の問題解決思考が主でした。言い換えれば、始まりから終わりまで一直線の“固定的・線形的な進め方”でした。そこでは、事前に定められた計画を目標達成に向かって実施していく進捗管理（プロセス・マネジメント）が大切でした。しかしながら、変動性・複雑性に富んだVUCA社会では、問題を多角的に捉え、解決策を試行し、そこで分かったことからさらに問題を深掘りするという“状況的・循環的な進め方”が必要になります。これからの地域の協働の推進においても、VUCA社会に向き合う探究活動においても、このような、状況的・循環的な進め方が求められていると言えるでしょう。

このような状況的・循環的な進め方では、事前に決められた計画通りに進むことはありません。変化が生まれることを前提としながら、多様な主体とともにコンソーシアム（協働体制）を構築し、情報や知見を共有し、物事を多角的に捉え、力を持ち寄る協働を進めながら最適解を更新し、互いに学びを深めていくといった相互作用を生み出すしくみを整えていくことが必要になります。ここでは、進捗管理だけではなく、「しくみとその運営（ガバナンス）」が重要になってきます（図）。この統合モデルには、（1）プロジェクト構成員の関与・参加のしくみ、（2）状況的・循環的な進め方を機能させる協働プロセス、（3）互いに探究し学びあう社会的学習、（4）運営制度の設計、（5）変化を促すチェンジエージェント機能、（6）活動結果や成果を評価し、社会に定着していくしくみ、などが含まれています。

高校CNは、この「しくみとその運営（ガバナンス）」において、「チェンジエージェント機能」としての役割が期待されていると言えるでしょう。ここでは、ファシリテーターとしての役割（プロセス支援）や、さまざまなアイデア、視点、情報などをつなげる役割（資源連結）、具体的な問題解決にむけて打開策を提示する役割（問題解決策提示）なども求められています。そして何よりも必要なのは、状況を可視化し、協働と学びのプロセスにエネルギーを与えるといったビジョンを提示する役割（変革促進）が求められていると言えるでしょう。

参考文献：佐藤・広石（2018）
『ソーシャル・プロジェクトを成功に導く12ステップ』、みくに出版



図：協働ガバナンス・チェンジエージェント機能・社会的学習プロセスの統合モデル（佐藤・広石、2018）

【参考文献・注釈】

参考文献

- 小田理一郎『「学習する組織」入門―自分・チーム・会社が変わる持続的成長の技術と実践』英治出版、2017年
- 熊平美香『リフレクション　自分とチームの成長を加速させる内省の技術』ディスカヴァー・トゥエンティワン、2021年
- 佐藤真久、広石拓司『ソーシャル・プロジェクトを成功に導く12ステップ』みくに出版、2018年
- 佐藤真久 広石拓司『SDGs人材からソーシャル・プロジェクトの担い手へ』みくに出版、2020年
- J.D.クランボルツ、A.S.レヴィン『その幸運は偶然ではないんです！』ダイヤモンド社、2005年
- 菅野拓「職業としてのコーディネーター ―越境的協働を促すメカニズムの体現者―」『国際開発研究』第30巻第2号、2021年
- 樋栄ひかる『Yes、andで、すべてはうまくいく！』幻冬舎、2006年
- 田村知子『カリキュラムマネジメントの理論と実践』日本標準、2022年
- 中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」2021年
- 堂目卓生、山崎吾郎『やっかいな問題はみんなで解く』世界思想社、2022年
- 水原克敏、高田文子、遠藤宏美、八木美保子『新訂 学習指導要領は国民形成の設計書：その能力観と人間像の歴史的変遷』東北大学出版会、2018年
- 文部科学省『高等学校学習指導要領』2018年
- 文部科学省『生徒指導提要』2023年
- 山内道雄、岩本悠、田中輝美『未来を変えた島の学校―隠岐島前発ふるさと再興への挑戦』岩波書店、2015年

注　釈

第1章｜高校コーディネーターの必要性

1.学習指導要領：全国の学校で一定の水準の教育を受けられるように文部科学省が定める教育課程の基準。時代の変化や子どもたちの状況、社会の要請を反映させるために、約10年に1度改訂される。
2.資質・能力の3つの柱：実際の社会や生活で生きて働く「知識及び技能」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」、学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」。
3.中央教育審議会：文部科学大臣の諮問（意見を尋ね求めること）に対して、教育・学術・文化に関する重要事項を調査審議し、答申（意見を申し述べる）する審議会。文部科学大臣はこの答申を受けて、施策を決定する。
4.スクール・ミッション：各高等学校の存在意義や期待される社会的役割、目指すべき学校像。
5.スクール・ポリシー：各高等学校の教育活動の基本方針。スクール・ミッションをふまえ、下記の3つを策定したもの。
①卒業の認定に関する方針（グラデュエーション・ポリシー）
②教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー）
③入学者の受入れに関する方針（アドミッション・ポリシー）
6.教育基本法第1条（教育の目的）：「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」。
7.新自由主義：政府などによる規制の最小化と、自由競争を重んじる考え方。
8.OECD：経済協力開発機構。ヨーロッパ諸国を中心に日・米を含め38ヶ国の先進国が加盟する国際機関。国際マクロ経済動向、貿易、開発援助といった分野に加え、最近では持続可能な開発、ガバナンスといった新たな分野についても分析検討されている。
9.キーコンピテンシー：特定の文脈の中で複雑な要求に対応することができる力（コンピテンシー）の中で、特に①人生の成功や社会の発展にとって有益、②さまざまな文脈の中でも重要な要求（課題）に対応するために必要、③特定の専門家ではなくすべての個人にとって重要な力を指す。
10.PISA：OECD生徒の学習到達度調査。
11.コミュニティ・スクール：地域住民や保護者などが学校運営に参画する学校運営協議会を設置した学校。
12.越境人材：企業や組織の枠を超えてさまざまな学びを得て、新しい価値を創造できる人材。英語ではインタープレナーと呼ばれ、よりよい社会に向けて越境しながら働く人を指す。
13.1on1（ワンオンワン）：上司と部下が定期的に1対1で行うミーティングで、部下の成長をサポートするためのマネジメント方法。

第2章｜高校コーディネーター人物図鑑

14.コンソーシアム：共通の目的のために集まった共同体。合意形成と協働活動を一体的かつ安定的・計画的・持続的に行えるようにするための構成員・規約・予算等を有する組織。
15.STEAM教育：「Science（科学）」「Technology（技術）」「Enginnering（工学）」「Arts（芸術）」「Math（数学）」の頭文字からなる、学習を実社会での問題発見・解決に活かしていくための教科横断的な教育の枠組み。
16.キャリアパス：目標とする役職や立場などに到達するために必要なスキルや経験などを示した道筋のこと。
17.コレクティブインパクト：企業や行政、NPO、市民などさまざまな分野の人々が各領域を越えて協力し、社会問題に取り組むことで生まれる成果。
18.VUCA：「Volatility（変動性）」「Uncertainty（不確実性）」「Complexity（複雑性）」「Ambiguity（曖昧性）」の頭文字を取ったもので、物事の不確実性が高く、将来の予測が困難な状態を指す造語。
19.トリックスター：民話や神話などに登場するいたずら者。秩序の破壊者でありながら創造者としての役割も担う。

第3章｜高校コーディネーターの職務と期待される力

20.チームビルディング：組織を開発するための手法のひとつ。チームの目標や理想を達成するため、チームにおいて個々の能力や個性を最大限に発揮できる環境作りや取り組み全般のこと。
21.ファシリテーション：人々の活動が容易にできるよう支援し、うまくことが運ぶよう舵取りすること。集団による問題解決、アイデア創造、教育、学習等、あらゆる知識創造活動を支援し促進していく働きを意味する。
22.ロールモデル：主にキャリア形成にあたってお手本にできる人物像。「役割の模範」
23.コーチング：コーチと対象者が対話を通じて、対象者が目標達成に向けて主体的に行動することを支援するプロセス。
24.デザイン思考：ユーザー視点から、デザイナー的な感性やアプローチを通じて、問題解決につなげる発想法。
25.システム思考：物事の全体像を「システム」として捉えて、その問題が発生している要素を多角的な視点で分析し、解決に向かうアプローチ。
26.ロジックモデル：ある施策がその目的を達成するに至るまでの論理的な因果関係を明示したもの。
27.プロトタイピング：製品やサービス、プロジェクト等を開発する前に試作品（プロトタイプ）を作成し、その機能やデザイン、使い勝手などを検証する手法。
28.プロジェクトマネジメント：プロジェクトの目的を達成するために必要な、計画、実行するプロセス管理手法。
29.ビジョナリー：先見の明のある人。特に、事業の将来を見通した展望を持っている人。
30.アンラーン：新しい知識やスキルを獲得するために、これまでの既成概念や固定観念を見つめ直し、手放す学習方法およびそのプロセス。

#ソーシャルキャピタル：社会関係資本。社会的な繋がり（ネットワーク）とそこから生まれる規範・信頼。
#水平思考：問題解決のために既成の理論や概念にとらわれずアイデアを生み出す方法。
#ダブルループ学習：問題に対して、既存の目的や前提そのものを疑い、それらも含めて軌道修正を行うこと。
#プロセスコンサルテーション：組織やチームの中で個々のメンバーの間で起きている目に見えない動きや影響関係、関わり方、相互作用、相互行為である「プロセス」に対し、組織メンバー自らが目を向け、気づき、働きかけ変えていくことを支援する組織開発コンサルタントの方法。
#レジリエンス：困難や危機に直面したときに、しなやかに乗り越え回復する力、あるいはその能力。
#タフネス：頑丈で、粘り強いこと。
#ネガティブケイパビリティ：不確実な状況や答えのない問題に直面した際に、すぐに結論を出そうとせずに、その状態を受け入れる力。
#サーバントリーダーシップ：「リーダーはまず相手に奉仕し、その後相手を導くものである」という考えのもとに生まれた支援型リーダーシップのこと。
#本質看取：現象学の方法に基づいた哲学対話の一種で、物事の本質を自分自身の経験を通して洞察していくこと。

おわりに

令和5年度実施の高校CNアンケートでは、全国で230人以上の高校CNが活動していることがわかっています。しかし、約5,000校ある高校に対してまだまだ少数で、その背景には、高校CNの必要性への理解や、専門性や処遇の整備、採用・配置へのハードルなど、さまざまな課題があります。

本ガイドブックでは、高校CNの一番の悩みや課題として挙げられていた「期待される役割の曖昧さ、不明瞭さ」に対して、高校CNの職務や期待される力の整理、その養成・育成の方法例、また「高校CNの活躍」に向けて、採用や配置、受け入れの実例やアイデアなどを紹介してきました。こうした知見は、高校CN草創期に学校と地域・社会をつなぐ役割を試行錯誤し、成果を積み上げてきた実践者である高校CNの方々、そして共に土台をつくってこられた教職員や教育委員会などの設置者のみなさんの努力の賜物です。本事業においては、「高校コーディネーター全国フォーラム」にて高校CNについて全国規模での対話の場を設けることができました。また、「高校コーディネーター研修」において、高校CNに期待される力の習得と学びを通したコミュニティを形成することができました。これらは、高校CNの配置に大きな一歩と言えるでしょう。

一方で、高校CNの継続的な養成・育成機会の担保、処遇改善や配置の財源の確保、高校CNの配置効果（生徒の学習効果、協働体制運営への効果など）の測定方法確立など、課題も残されています。特に、学校という異文化の中で孤軍奮闘する高校CNが直面する悩みや課題を解決するような、すぐに役立つ情報は盛り込むことは出来ませんでした。今後は、高校CN同士が支え合うコミュニティの発展、さらには、高校CNが活き、活かされるために、本ガイドブックを活用した高校CNの認知度の向上、その処遇と専門性の確立、配置の財源確保が重要だと考えられます。

高校CNは、教員や地域・社会の方々との協働を通し、社会に開かれた教育課程を実現し、総合的な探究の時間をはじめとした、探究的な学びを実現する要として期待されています。時代変化が激しい昨今、生徒が地域や社会につながりながら、自らの生き方在り方を考え、探究的に学ぶことができる環境づくりは、喫緊の課題です。だからこそ、関係各所が協働して高校CNを配置し、配置された高校CNがさらなる協働体制を構築、運営していける、そんな未来の高校づくりに多くの方々が参画していただけることを願っています。

HIGH SCHOOL COORDINATOR
START GUIDE BOOK
学校と地域・社会をつなぐ
高校コーディネーター
スタートガイドブック

学校と地域・社会をつなぐ
高校コーディネータースタートガイドブック

令和7年3月発行

発行元
文部科学省
〒100-8959 東京都千代田区霞が関3丁目2−2

制　作
株式会社三菱UFJリサーチ＆コンサルティング

編　集
一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム

デザイン
高橋美紀（とるねい堂デザイン）

本ガイドブックは、文部科学省委託事業
「高校コーディネーター全国プラットフォーム構築事業」
において作成しました